

第3章 出土遺物

今回の調査では、28リットル入りコンテナ約200箱分の遺物が出土した。その大半は江戸時代に属すると考えられる土器、陶磁器、瓦類、土製品、石製品、石造物、金属製品（鉄製品・銅製品）、動物遺存体等であり、他に中世に属すると考えられる瓦や、近代に属する瓦、煉瓦がある。このうち図化を行ったものは土器・陶磁器・土製品等396点、瓦41点、石製品5点、鉄製品26点、銅製品21点である。法量等の詳細は観察表にゆずり、本章では、種別ごとに概要を述べる。

第1節 土器・陶磁器等⁽¹⁾

(1) 第1遺構面

S E102出土遺物のうち、土師器皿（灯明皿）や陶器（碗：肥前系、嬉野窯、京焼系、皿：瀬戸美濃窯、火入れ：丹波窯）を図化した。ほかに須佐窯の擂鉢などが出土している。

S E103では、土師器皿、磁器（碗・小杯：肥前系）を図化した。ほかに在地系と考えられる柿釉を施した花生や須佐窯の擂鉢などがある。

S X101からは、土師器（皿・炮烙）や陶器（碗：嬉野窯）のほか、白磁片が出土している。土師器炮烙は、難波分類のD類に相当するものと考えられ、18世紀以降に盛行するようである。

S K103には、江永窯の陶胎染付簡茶碗13や波佐見窯の猪口14、花生15がある。

S K121では、土師器蛸壺17や波佐見窯青磁染付碗18を図化した。

S X131では、土師器皿・炮烙を図化した。炮烙19は、難波分類B類（17世紀第2四半期以降成立）であろうか。ほかに肥前系京焼風碗や丹波窯火入れなどが出土している。

S X103では、埋桶の内部から錢貨などとともに出土した磁器八角鉢20がある。口縁部内面は墨弾きによる文様を施し、見込みに宝袋を描く。

S P101出土の土師器蛸壺22は胞衣壺に転用されていたものである。

S X113出土遺物には、図61上段に示したものがあるが、23・24と同形・同大の碗は他にも数個体分ある。5個程度の単位の組み物の一部と考えられる。またこの遺構からは、写真図版26・27に示したように、水滴や飯事道具などの特徴的な遺物が多く出土している。これらのものは完形品がほとんどなく、いずれも破片の状態であるが、水滴には同文あるいは同種のものもみられ、ややまとまった量が出土していることに特徴がある。

S K115の土師器火舍35には、底部内面中央にらせん状のヘラガキや、同隅に墨書による文様が描かれている。

S K110からは、土師器炮烙や景德鎮窯青花碗が出土している。土師器炮烙36は、口縁部に接して一対の把手（中央に円孔を穿つ）がつくタイプで、難波分類のD類であろう。景德鎮窯の碗37は見込みに水禽文をもち、16世紀末のものと考えられる。

以上、第1遺構面の遺構出土遺物については、18世紀前半のものが主体を占めるが、中には18世紀後半～19世紀を示すものがあり、第1遺構面検出遺構の時期に幅があることを示している。

(2) 第2遺構面

S B209からは、イロリ断割中に唐津窯壺や襲皿が出土している。17世紀第1四半期のものと考えられ、やや古い時期のものであり、断割中の出土でもあるためS B209より古い時期を表しているのかもしれない。

S X203からは、波佐見窯碗（43・44）や瀬戸美濃窯菊皿45、須佐窯擂鉢などが出土した。

S X204では土師器皿2点（54・55）を図化した。

S B201については、第2章でも述べたように、火災にあって焼失し、その後盛土を伴う整地が行われ、おそらく町屋が建て替えられたものと考えられる。ここでは、床面、焼土面、焼土層、整地層といった堆積層ごとにそれぞれの出土遺物を検討するが、結論を先にいえば、各層位から出土した遺物に時期差は認められないと考えられる。

上面整地層については、S B201とS B202の境界が明確ではないため、正確にS B201のみの整地層と断定できないが、土師器、陶器、磁器などが出土している。陶器には唐津窯碗・皿や、嬉野窯碗・皿、京焼系碗、瀬戸美濃窯皿、備前窯花生、須佐窯擂鉢などがあり、磁器には波佐見窯碗・皿などがある。S B201裏としたS B201建物の西側敷地内と考えられる地区的整地層からも土師器焼塩壺、嬉野窯碗、唐津窯擂鉢、須佐窯擂鉢、波佐見窯皿・仏飯具などがある。その下層の焼土層では、初期伊万里碗、波佐見窯碗・鉢、漳州窯青花皿などが出土している。焼土面上からは波佐見窯碗・小壺などが出土している。S B201裏焼土面では備前窯擂鉢、須佐窯擂鉢がある。床面では、土師器皿、唐津窯擂鉢、波佐見窯皿、肥前系白磁皿などが出土している。

イロリ（＝S P201）では土師器皿72などが出土している。

先述のように焼失後に整地が行われているため複数の層位から出土した破片が接合した例があるほか、S B201以外の他の遺構から出土した破片とも接合したものがある。59の波佐見窯碗や60の産地不明陶器甕、62の波佐見窯盤などが該当する。

S B201に付随する施設として建物の西側で検出した2基の長櫛状遺構（S X127・S X209）のうち、特にS X127からは多量の遺物が出土した。調査段階では上層・下層・最下層として大きく3段階に分けて遺物を取り上げたが、上層出土の破片と最下層出土の破片が接合したものもあることなどから層位による時期差はないものと判断した。そのため実測図も層位に関係なく掲げている。

S X127出土遺物には土師器皿・泡烙、瓦質土器火舎、嬉野窯皿、肥前系京焼風碗、肥前系白釉碗、唐津窯鉢、瀬戸美濃窯擂鉢、須佐窯擂鉢、波佐見窯皿・蓋碗蓋、肥前窯碗・小壺、景德鎮窯青花皿などがある。

S X209からは、量的には少ないものの、土師器皿、初期伊万里皿、肥前窯碗などが出土した。

S B202では上面整地層から、土師器、唐津窯皿、瀬戸美濃窯皿、波佐見窯皿などが出土している。上面焼土からは、唐津窯（甕屋窯のものか）鉢、初期伊万里窯皿、肥前窯碗・皿などが、上面検出中には初期伊万里皿・壺などが出土している。

イロリでは丹波窯擂鉢、波佐見窯小碗、景德鎮窯皿、カマドからは土師器皿（灯明皿）などが出土している。

S B202に付随するS X202からは、漳州窯青花盤の破片が出土している。

S B203では、上面整地層から、土師器、肥前窯碗、初期伊万里皿、波佐見窯碗・壺が出土し、S B203裏上面整地層からは、唐津窯皿、肥前窯碗などが出土している。S B203焼土層からは波佐見窯皿、同裏焼土層では須佐窯擂鉢などが出土している。またS B203焼土面直上では、土師器皿、景德鎮青花皿などが、同裏焼土面直上では肥前窯壺などが出土している。また建物部分の東側、斜面部分では土師器泡烙や波佐見窯壺などが出土している。

S B204では、上面焼土から土師器、唐津窯皿・盤、瀬戸美濃窯皿、備前窯壺・蓋、丹波窯擂鉢、初期伊万里皿などが出土している。

S B204に付随するS X201からは土師器皿、波佐見窯盤、景德鎮窯青花碗などが出土している。S X208では埋桶内から唐津窯皿、丹波窯擂鉢・火入れなどが、掘形から土師器皿、初期伊万里皿などが出土している。

S X207からは土師器皿などが出土したほか、検出中に磁器水滴127が出土している。

S B205からは、土師器皿、備前窯徳利、波佐見窯碗、初期伊万里皿、波佐見窯碗などが出士している。

S B206からは土師器皿、初期伊万里皿などが出土している。

S X210からは、土師器皿（灯明皿）、施釉土師器皿（灯明皿）、嬉野窯皿、波佐見窯碗などが出土している。

第2遺構面出土遺物は概ね18世紀前半のものが中心であるが、17世紀第2四半期の初期伊万里や16世紀末～17世紀初めの中国製青花、備前窯製品、17世紀前半あるいは後半の唐津窯製品などや古い時期を示す遺物が含まれる。

（3）整地層ほか

第2遺構面の下層については、特に東部において顕著であったが、整地に伴う土層の堆積がみられ、主に整地層という名称で取り扱った。また第2遺構面の基盤層からも遺物が出土した。これらの層位は第2遺構面よりも下位に位置し、第3遺構面よりも上位に位置することになるため、ここで扱うこととする。さらに、東部においては、頻繁に整地や穴の掘削が行われたことが予想される。整地層についても掘削中に土坑などがみつかることが多く、現地においては、整地層および整地層（下）として取り扱ったが、基本的に両者の間には顕著な時期差は認められない。

まず、東部の整地層および整地層（下）からは、土師器皿・焼塙壺、唐津窯皿・鉢、嬉野窯碗・皿、瀬戸美濃窯碗・皿、丹波窯火入れ、備前窯皿・火入れ、初期伊万里皿、波佐見窯碗・皿・小坏・仏飯具・青磁香炉、漳州窯青花盤などが出土している。漳州窯青花盤は16世紀末～17世紀初め頃に遡る可能性もあるが、他は17世紀後半ないし18世紀前半頃のものが多くを占める。

（4）第3遺構面

第3遺構面では特に、東部において顕著に遺構を検出し、遺構内からは多くの遺物が出土した。前述のように東部での遺構検出が整地層を掘り下げながら順次検出・掘削したものであることから、遺構出土の遺物と整地層出土の遺物に顕著な時期差はなく、また接合関係も認められる。以上の状況は、頻繁に遺構が掘削されたことを物語っていると考えられる。特に素掘りの遺構についていえることだと思われるが、東部で検出した遺構の多くはごみ穴であったり、あるいは整地を行う際の一つの単位としての穴である可能性も考えられる。

S X313からは、備前窯受付皿（灯明皿）、唐津窯徳利、丹波窯鉢、瀬戸美濃窯擂鉢、波佐見窯碗・徳利などが出土している。

S X315では、土師器皿（灯明皿を含む）、瀬戸美濃窯香炉、備前窯擂鉢、波佐見窯皿・坏・青磁坏、肥前窯碗、景德鎮窯皿などが出土している。

S X351は、土師器皿・炮烙、施釉土師器皿（灯明皿）、唐津窯壺、瀬戸美濃窯碗、初期伊万里碗・皿、漳州窯青花碗などが出土している。

S K301は、まとまって遺物が出土した。土師器皿（墨書土器・灯明皿を含む）や炮烙・婧壺、施釉土師器受付皿（灯明皿）、唐津窯碗・大鉢、肥前系京焼風碗、嬉野窯香炉、瀬戸美濃窯皿・丹波窯火入れ、須佐窯擂鉢、波佐見窯碗・皿・鉢、漳州窯青花碗・五彩皿などが出土している。

S K302は、土師器皿・炮烙、嬉野窯皿、瀬戸美濃窯碗、須佐窯擂鉢などが出土している。

S K303からは、土師器鉢、肥前系碗、嬉野窯皿、波佐見窯碗・皿・仏飯具などが出土したほか、S K303をはじめ複数の遺構や整地層などから出土した破片が接合した資料に、唐津窯刷毛目文鉢243がある。

S K308から土師器皿などが出土している。254は墨書き器である。底部内外面に墨書きがみられるが、書かれている内容は不明である。内面は無造作に線が重ねているようにもみえ、文字あるいは記号などを意識したものではない可能性も考えられる。

S X301には、土師器皿（灯明皿を含む）、唐津窯碗・鉢、嬉野窯皿、丹波窯擂鉢、須佐窯擂鉢、波佐見窯碗・皿・徳利・仏飯具などがある。

S X302は、土師器皿・蛸壺、瓦質土器火舎、嬉野窯皿、瀬戸美濃窯皿、京焼系鉢、備前窯鉢、須佐窯？擂鉢などがあり、275や277はS X303との接合資料である。277は漳州窯青花盤で口縁部や体部は一部のみの残存であるが、見込みに不死鳥文を描く底部はほぼ完存している。

S X306やS X316、整地層から出土した破片が接合した278は波佐見窯皿で、見込みに岩鳥文を描いている。

S X308は、土師器焼塩壺、嬉野窯皿、瀬戸美濃窯鉢、波佐見窯皿のほか、産地不明の磁器小壺が出土している。

S X316は大量の遺物が出土した。第2章で触れたように2つの遺構が切り合っていた可能性も考えられるが、出土遺物に顕著な時期差が認められないため、一括して図72～74に掲げた。土師器皿（灯明皿を含む）、施釉土師器灯火具、唐津窯碗・鉢・大鉢・擂鉢、肥前系京焼風碗・香炉、嬉野窯皿、備前窯皿・擂鉢、丹波窯火入れ・甕、瀬戸美濃窯擂鉢、肥前窯白磁小杯、波佐見窯碗・皿・壺・小壺・徳利・猪口・仏飯具、備前窯皿・擂鉢、漳州窯青花碗などが出土している。

S X318・S X320からは、土師器炮烙が出土している。

S X323からは、瀬戸美濃窯片口鉢、須佐窯擂鉢、初期伊万里皿、波佐見窯皿、漳州窯五彩盤が出土した。

S X324では、唐津窯皿、瀬戸美濃窯鉢、京焼系皿、波佐見窯碗が、S X352では、肥前窯碗、肥前系京焼風碗、須佐窯擂鉢、波佐見窯仏飯具などが出土している。356の底部外面には墨書きがみられる。

S B305からは、土師器皿や壺と思われる産地不明陶器などが出土している。

S P301出土の361は胞衣壺に転用されていた土師器蛸壺である。

そのほか第3遺構面上で出土した丹波窯擂鉢362を図76に掲げた。

(5) 第3遺構面ベース層

第3遺構面の基盤となる層から出土した遺物を図76に掲げた。

東部では、土師器焼塩壺蓋、初期伊万里碗、丹波窯甕などがあり、273は体部外面に鏽を施し、「福」字を縦に3字ずつ等間隔に配置するものである。

中央部では、土師器三足付皿、唐津窯碗、産地不明陶器瓶、磁器水滴などが出土している。

(6) 第4遺構面

S X403からは、土師器皿、肥前窯筒茶碗・壺、瀬戸美濃窯香炉、波佐見窯碗・皿などが出土している。

S B403からは、唐津窯皿・鉢などが出土している。

第4遺構面出土遺物については、中国製磁器（景德鎮窯、漳州窯）が16世紀～17世紀初め、国産陶磁器は17世紀前半頃のものと考えられる。

(7) 第4遺構面ベース層

第4遺構面の基盤となる層としては、S B 401やS B 402といった遺構検出地区にあたるものと、その他の基盤層の部分で出土したものがある。

S B 401ベース層からは、瓦質土器火舎、唐津窯碗・皿、漳州窯青花碗・盤、景德鎮青花碗、龍泉窯碗などある。龍泉窯の青磁碗は15世紀後半、景德鎮窯青花碗は16世紀代、漳州窯青花は16世紀末から17世紀初め、唐津窯は17世紀第1四半期のものに比定される。

S B 402ベース層には、土師器皿、唐津窯皿などがある。唐津窯の376は皮鯨手と呼ばれるもので17世紀第1四半期に、283の白釉皿は同第2四半期に比定される。

そのほか東部のベース層では漳州窯白磁皿が、中央部では唐津窯皿、瀬戸美濃窯の可能性のある小天目碗、龍泉窯碗などが出土している。

以上のベース層出土遺物は、龍泉窯の青磁碗は15世紀後半、唐津窯や瀬戸美濃窯は、17世紀代頃と考えられる。

(8) 第4遺構面造成層

上記の第4遺構面ベース層の下位に位置する造成層から多くの遺物が出土している。大規模な造成が行われた中央部や西部でその傾向が顕著で、中央部では、土師器皿・炮烙、唐津窯皿、備前窯花生、中国製磁器皿などが出土している。西部では、丹波窯火入れ・片口鉢・擂鉢、肥前窯の可能性のある碗、肥前窯皿などが出土している。

(9) 第5遺構面

S D 501からは漳州窯白磁碗、朝鮮王朝陶磁船徳利底部片が出土している。いずれも16世紀末～17世紀初め頃のものと考えられる。

S K 502からは、波佐見窯白磁碗が出土している。17世紀後半のものである。

中央部落ち込みからは、漳州窯青花碗が出土している。16世紀末～17世紀初め頃のものと考えられる。

(10) 特殊遺物

○墨書き土器

土師器皿・罐壺など約20点に墨書きが認められる。判読不明のものも多いが、土師器皿については、S K 301出土の220は「の」、精査中出土の395は「八」、396は3行以上縦書きで、「天道□天徳カ□」と読める。磁器仏飯具の底部外面にみられる354は、「大佛口」であろう。

○焼塩壺

全体で約20点出土している。第1・2遺構面からの出土は少なく、整地層および整地層（下）として取り上げたものが多いほか、第3遺構面以下の出土が主である。大半は身であり、蓋は第3遺構面ベース層出土の363（小川分類ア類①）、1点のみである。身については、口縁部の形態がわかるものについては、大半が体部からそのまま口縁に至る小川望氏の分類のI類で、II類の口縁形態をもつものは2点のみであった。整地層から出土した144の体部外面には「泉湊伊織」の刻印が認められる。また整地層（下）出土の1点も、欠損しているが、残存する体部外面に「□伊カ織カ」の刻印がある。小川氏の研究によれば、焼塩壺の生産者（=壺屋）には藤左衛門系、泉州麻生系、泉州磨生系の3系統をはじめとする複数の系統があり、「泉湊伊織」の刻印は、藤左衛門系の生産によるもので、1730年頃からみられ始め、1740年代から1800年代までコップ形の焼塩壺の刻印の主流として盛行するものである。上記の刻印をもつものはいずれも整地層（整地層）からの出土であり、時期的には上記の盛行期間の中には収まるものと考えられる。

そのほか、144やS B209ベース土出土の完存品171の内面には布目痕が残る。

○水滴

S X113からまとまって出土しているほか、S X207出土の127や、S K303の251、第3遺構面ベース層出土の369などがある。多くは直方体状の形態のものであるが、S X113には特殊な形態をもつものも含まれるほか、369も兎を表現する。

○贋水入れ

第1遺構面遺構（S K113、S X106）、第2遺構面遺構（S X127）、整地層などから、計12点出土している。土師器、施釉土師器、磁器、陶器のものがあるが、完存するものはない
小結

以上、各遺構から出土した陶磁器等について記してきたが、今回の調査で出土した陶磁器は、大きく国内産の陶器・磁器、外国産（輸入）陶器・磁器に分けられる。

輸入陶磁器では、中国製磁器である景德鎮窯青花や漳州窯青花が小片も含めると一定量含まれ、その他にも朝鮮王朝陶磁、中国製青磁やベトナム製品もわずかながら含まれる。漳州窯青花のうち275の盤は、口縁部は一部しか遺存していないが、不死鳥文を描く見込み部分はほぼ完存しており、貴重な資料といえる。これらは国产陶磁器よりも古い年代を示す。そのほか产地不明としたものの中にも外国産の製品が含まれている可能性も考えられる。

国内産陶器のうち、唐津窯の製品については、碗や皿に砂目のものがみられる。鉢には、二彩手や三島手のものがあり、合わせ口で窯詰した際の痕跡が残る。擂鉢も数は少ないがみられる。

嬉野窯の製品は、銅線釉をかけ、見込みを蛇の目釉刺ぎした皿が目立つほか同様のつくりの碗もみられる。ほかに、口縁を輪花状につくるやや大型の皿もあり、珍しい器形といえるだろう。また透明釉をかけて同様に製作した皿もみられる。18世紀前半の製品が多い。

京焼系あるいは京焼風と呼ばれる碗も一定量みられる。高台内に円刻とともに銘がみられるのが一般的で、今回の確認例では、「清水」「小松吉」、「木下弥」などのほかS X316出土の289では円刻が2重で、加えて逆L字（あるいは長方形）の区画内に「下一カ」の銘がみられ、またそのほかにも記号状で判読不明な銘もみられた。

備前窯の製品には、皿（灯明皿）や甕、擂鉢、蓋がみられる。

丹波窯では、火入れや甕、壺、擂鉢などの製品がみられる。

そのほか、神戸市内では現段階では兵庫津遺跡のみで確認されている、須佐窯の製品と考えられる擂鉢が少量ながら出土している。⁽¹⁾

註

- (1) 当調査出土の陶磁器等については、生産地や時期の比定など森村健一氏よりご指導を得ました。記して感謝致します。
- (2) ただし当時の泉州（大阪府南部）の焼塩はブランド品であるため、刻印をもつ焼塩壺も含め各地で模造された場合もあることを森村健一氏よりご教示を受けた。記して感謝いたします。泉州で生産された焼塩壺かどうかを正確に判断するためには、小川氏が述べるような胎土の特徴をもつかどうかについて分析を行うなどが必要であろう。
- (3) 当調査出土の須佐窯擂鉢については、佐伯純也氏より種々ご教示を得ました。記して感謝申し上げます。兵庫津遺跡における須佐窯擂鉢と考えられる資料については、第42次調査の報告書において阿部功氏により注意されて以来、その後の調査で少しづつはあるが資料が増加しつつある。ただし、確実に同窯の製品かどうかについては、生産地出土の資料との照合作業などが必要である。たとえば山陰地方出土の須佐窯擂鉢には底部外面に叩き痕がみられるものが一定量存在するというが、当遺跡出土の底部には、管見の限りでは認められない。今後もさらに調査・検討を加えたい。

第2節 瓦塼等

今回検出した各造構や整地層等からは、瓦塼類も多く出土している。このうち41点を図化し、図78～80に示した。図78は軒丸瓦、図79は軒平瓦・軒棟瓦、図80は道具瓦等である。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は瓦当部文様を確認できたものはすべて巴文で、出土資料中に文字瓦は認められない。遺存状況により断定できないものもあるが、遺存状況から判断すれば、おそらく全て三巴文と考えられる。さらに、珠文を確認したものが多く、逆に明らかに珠文をもたないものも認められないことから、おそらく軒丸瓦の文様は、全て連珠三巴文と考えられる。巴の巻の方向については、頭から尾の方向でとらえることとするが、確認できたものは全て左巻きである。また巴の尾部が隣の巴の頭部に接するものは、搅乱出土資料を除き認められない。内区文様と外区文様を画する圈線については、出土資料中に認められない。以上の状況は、今回出土したものの大半が江戸時代に属するものと考えられることと整合性が認められる。

図78においては、出土遺構の検出位置や時期に問わらず、珠文が小さく、かつ珠文間の間隔が広いタイプのものを上部に、次に、珠文の数が多く、珠文間の距離の狭いもの、さらに下段には珠文が前2者に比べて大きく珠文間の間隔が前2者の中間的なものである、江戸時代に通有にみられるものを配置した。最下段の2つは、巴が片流れ状を呈するものであるあくまで珠文の特徴から、図の上部はやや古い様相をもつもの、下段は上部に比して新しい様相をもつものと考えたものである。398には珠文部分に範キズが認められる。

(2) 軒平瓦・軒棟瓦

軒平瓦の瓦当文様については、主文様については、判明するものは三葉文と橘文である。脇文様は大半が唐草文で、そのうちの大半は子葉が3反転するものであるが、わずかに上向きのみのものや下向きのみのものがある。橘文と唐草文の組み合わせによる、いわゆる橘唐草文をもつものには、萼の先端が二股に分かれるものと分かれないものがあるほか、両端の子葉が、明確に分岐してY字になるものと、分岐が明確ではなく丸みをもったコブ状を呈するもの、全く分岐していないものがある。

図79は軒平瓦で、圈線をもつ412が室町～南北朝期頃に遡る可能性が考えられ、他の軒平瓦よりも古い様相をもつものと判断される。413～416は主文様（中心飾り）の状況は不明ながら反転せず一定の方向を保つ唐草文を脇文様とする。418～420は、三葉文を主文様とし、3反転する唐草文を脇文様とするもので、主文様の遺存しない417も同じ一群であろう。421、422主文様ははっきりとしないが唐草文を脇文様とする。423・424は上部に装飾をもつ三葉文を主文様とし、脇文様は2反転する突線による雲文で表現する。この2点の瓦当文様は出土資料で異彩を放つており、現在のところ神戸市内では類例は確認できない。大阪府堺市大安寺本堂に423と同文で近似した法量をもつ軒平瓦が使用されていたことが山崎信二氏によって紹介されている。また、多少の文様の退化傾向は認められるが、同文の軒平瓦が堺環濠都市遺跡の複数の地点で出土している。報告された資料は堺環濠都市遺跡においても少ないが、上記の出土例の存在から、現段階では堺の瓦ないし瓦工人と関係をもつものであると考えておきたい。

軒棟瓦は棟部と平瓦部の接合状況の判明するものは、全て右軒棟瓦である。この場合、建物側からみた場合に右に棟が位置するものとする。通常の棟瓦も同様に、右側に棟部がつくもののみで占められるものと考えられる。小丸付軒棟瓦と、鎌形軒棟瓦がある。小丸瓦当の文様は、遺構内出土のものでは明確ではないが、搅乱からは連珠三巴文や無文のものが出土している。

無文のものは、平瓦部も無文であり、明治期以降に下るものと考えられる。平瓦部の文様は、平瓦と同様の橘唐草文が主流で、わずかに認められる蛇の目文や無文のものは明治期以降のもとのと考えられる。429・430は、鎌形軒棟瓦である。

(3) その他の瓦

図80には、小菊丸瓦2点、丸瓦2点、堀瓦1点、引掛け（軒平）瓦1点、雁振瓦1点を掲げた。

431・432は小菊丸瓦で、いずれも二重菊で、432が8葉で、おそらく431も8葉であろう。

433・434は丸瓦で、ともに凸面はヘラケズリを施すが、434は広端部側をナデ消す。433の凹面はコビキB後内叩き、玉縁部に布目痕が残る。側縁や玉縁部凹面側に面取りを施す。

435は堀瓦である。今回の出土資料中に、堀瓦は一定量含まれている。

(9) 刻印瓦

544はおそらく軒棟瓦であるが、小丸瓦部あるいは鎌形を欠失している。平瓦部の瓦当文様は蛇の目文である。瓦当右端部に「瓦吉」の刻印をもつ。類例としては、兵庫区楠・荒田町遺跡第54次調査出土の瓦に「明石 瓦吉」の刻印をもつものが確認されている。当調査で出土したものは明石の文字が認められないため、同一の生産者によるものかは断定できない。なお明石の瓦製造業者のなかに「瓦吉」の屋号等を使用していたものは現段階では特定できていない。本例についても製造業者等の特定は困難である。時期についても特定できないが、焼成の状況や瓦当文様が蛇の目文であることなどから近代以降のものと想定しておきたい。

545は凸面に刻印をもつ。刻印は、長方形区画内を区画線で上下に分け、上部に右から横書きで「谷川」、下部に縱書きで「大野菊製」と記す。下部の刻印はやや不明瞭である。おそらく丸瓦であろう。凹面にはカキメを施す。谷川瓦は大阪府岬町に所在する瓦生産地である。

546は瓦積井戸6の井戸枠に用いられていた井戸瓦で、凹面上部に刻印をもつ。刻印は、長方形区画内を横線で上・下に区画し、上段に「専売特許/二、一、一、二、三、五」を二段書き（いずれも右から左へ横書き）し、下段に三行縱書きで、右から「神港」、「山中製」、「多六」と記す。この井戸瓦は通有の井戸瓦と異なり、設置した際に内側から見て、上辺と左辺に突起を設けて凸状とし、残る下辺と右辺を逆に凹状に彫ませている。通有の井戸瓦は平坦面通しを組み合わせるが、この瓦は凸面と凹面が強固に組み合うものとなっているため、構造上強固なつくりとなっている。このようなつくりの井戸瓦を用いていることの最も重要な意味は、標高0m以下の地下水を井戸水として利用する際に海水の侵入を防ぐことにあったものと想像される。この特殊なつくりをもった井戸瓦の開発に際して特許を取得したものと考えられる。ちなみに、専売特許条例は明治18年〔1885〕4月18日に公布・施行されている。特許取得第1号は同年8月14日に認定されているようである。今回特許番号が判明しているものの検索を試みたが、結果として特許番号から製造業者を特定するには至らなかった。製造業者である「山中」が屋号（の一部）なのか、会社名（の一部）を示すのかについても明確にしえなかつた。ただし「神港」の文字からは神戸市内に生産地あるいは会社（工場を含む）が所在した可能性は高いものと考えている。



544



545



546



図49 出土刻印瓦拓影

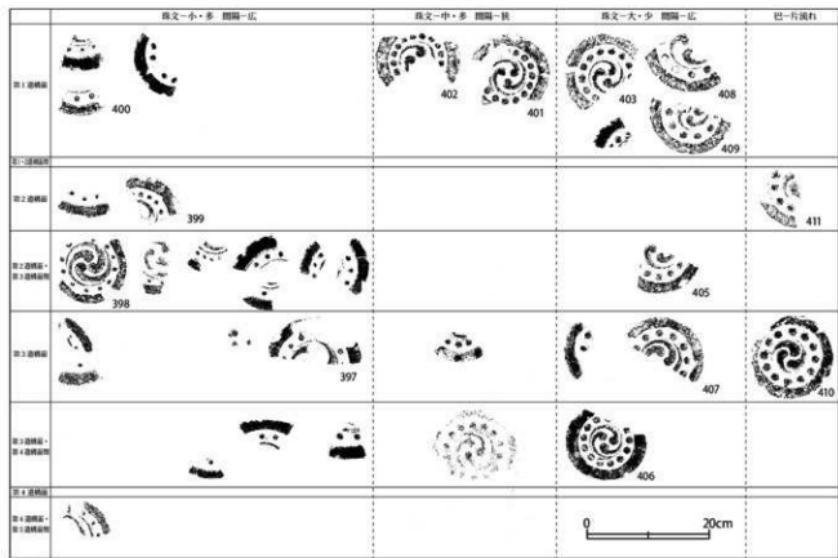


图50 各层位出土軒丸瓦拓影

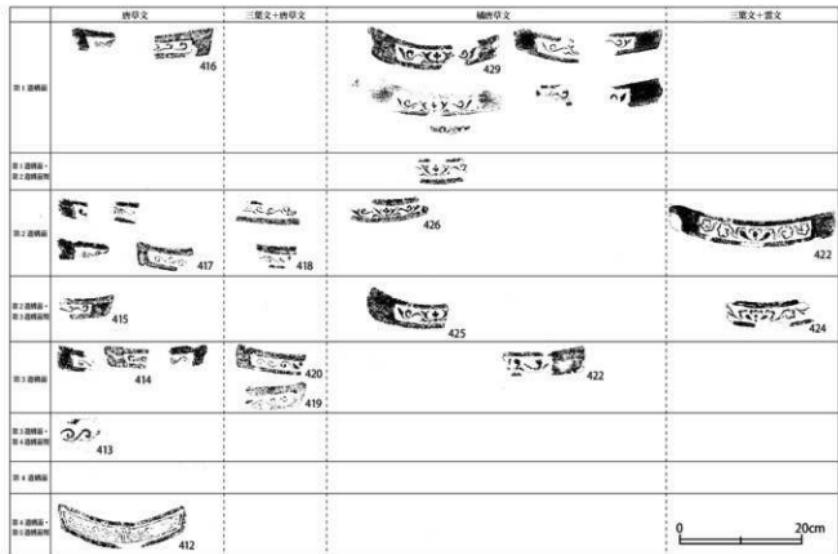


图51 各层位出土軒平瓦拓影

第3節 土製品

当調査で出土した土製品には、土錘、土人形、飯事道具、箱庭道具、芥子面、土鈴等がある。図化を行ったものは少數であるが、以下、個別に概略について触れたい。

(1) 土錘

今回の調査で検出した遺構は概ね江戸時代の中で納まる時期のものであり、各遺構面から出土した土錘に、時期による形態差は認められない。全時期を通じて、管状土錘と呼ばれるものが多数を占める。その他では、有孔有溝のタイプが少量含まれる。

管状土錘は大きさおよび太さにより、大まかに太・長、太・中、太・短、細・短の4タイプが認められる。以上の4タイプは時期による形態変化に乏しいものであるため、形態から時期を求ることはできない。なお、太・長～太・短タイプの分類は、完形で遺存していないものも多く、基準値を設定した明確な分類ではなく、あくまで便宜的に識別したことを断っておきたい。

有孔有溝タイプはこれまでの研究から、鎌倉時代から室町時代以降に認められるものである。

表2 出土土錘集計表

	第1遺構面	第2遺構面	整地層	第2遺構面ベース層	第3遺構面	第3遺構面ベース層	第4遺構面	第4遺構面ベース層	第4遺構面油成層	第5遺構面	精査中等	複数	合計
有孔有溝土錘	1	7	2	5	2	1	1	4	2	1	29	1	29
管状土錘	太・長タイプ	1	2		1		1			1	6		6
太・中タイプ	4	8	8	6	3				1	5	1	36	
太・短タイプ	16	97	37	10	14	51	4	13	12	22	11	287	
細・短タイプ	25	209	52	35	62	55	4	2	11	34	20	508	
合計	47	329	99	47	87	117	8	36	28	9	64	33	966

(2) 土人形

総点数で、64点を数える。

内訳は、最も多いのは仏像で、台座のみの残存5点を含めると計33点（第1遺構面に伴うもの2点、第2遺構面に伴うもの3点、整地層中10点、第2遺構面ベース層2点、第3遺構面に伴うもの4点、第3遺構面ベース層4点、精査中6点、搅乱内2点）を数え、全体の半数を占める。そのほかには、西行5点（SE103: 1点、SB205: 1点、整地層2点、SK352: 1点）、大黒天3点（SX112、SB208、搅乱内）、恵比寿天3点（SX115断面検出中、SK312、SX316）、人物3点（SB204: 1点、精査中1点、搅乱内1点）、馬上人2点（SB205、SB305裏ベース層）、地蔵2点（SB205ベース層）、力士3点（SX113: 2点、SX124: 1点）、武士1点（整地層）、虚無僧1点（整地層）、相撲〔大黒天・布袋天〕1点（SK352）、鯛2点（SK115掘形、SB205ベース層）、亀2点（SX127、SB201裏）、犬1点（SX113）、牛1点（SK109）、馬1点（整地層）、猿1点（SX301）、鳥1点（搅乱内）である。

(3) 飯事道具

SX113からやまとまつて（18点）出土するなど計64点出土している。

特徴的なものとして硯がある。SX113から9点出土したほか計11点あり、そのうち5点は墨が付着しており、使用痕と判断される。この場合に単に飯事道具の一つとして使用されたことも十分考えられるが、一方で小型の携帯品として使用された可能性も考えられる。今後も類例の調査に努めたい。SX113では文箱も出土しているが、こちらは筆を置いた状態を模しており、飯事道具であろう。そのほかでは、壺、甕、擂鉢、漏斗、碗、皿、注口付容器や徳利に加え、土師質や瓦質の羽釜など江戸時代の遺跡において通有にみられる飯事道具類が大半を占める。ほかに、三方も1点出土している。羽釜以外のものでは、土製のもののかに磁器製のものも一定量含んでいる。

(4) 箱庭道具

計6点出土している。

橋2点（S B206、攪乱内）、灯籠2点（S X113、整地層（下））、鐘楼1点（S E102）、船1点（整地層）である。

(5) 芥子面

計4点が出土した。

亀（S X103）、大黒天（S X124）、人物（顔）（S B201床面）、魚（攪乱内）と考えられる。そのほか、芥子面の型の可能性が考えられる土製品がS X112より1点出土しているが、内部（凹面側）の文様は明確ではない。

(6) 土鉢

4点が出土している。うち1点は攪乱内からの出土で、1点はSK128、他は第3遺構面の遺構（S X316、S X351）および整地層からの出土である。

197は、S X351下部で出土したものである。鉢に中で音を立てるための粘土の小塊も2点（もと1点の可能性もあり）遺存している。

第4節 石製品

石製品には、石、硯、石臼、浮子などがある。ほかに石製の遺物として五輪塔などの石造物があるが、それらについては次節に記述することとし、ここでは硯、砥石、石臼について述べる。

(1) 硯

今回の調査で出土した硯は、計7点である。これ以外に、後述する砥石には硯から転用されたものがあったと考えられる。

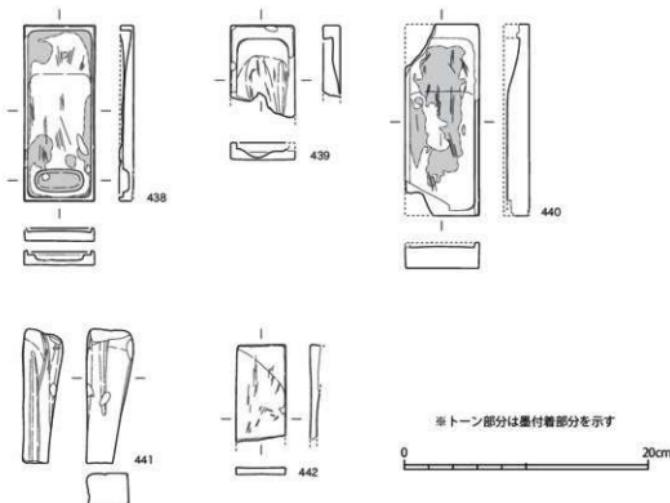


図52 出土石製品実測図

438は、S B201焼土面上面出土のもので、ほぼ完形である。陸部端に梢円形の窪みをもつ。

439は、S B201裏焼土面直上出土のもので、1/2程度が残存している。

440は、攪乱層出土であるが、一部を欠損するものの、ほぼ全体の形状の判明するものである。

(2) 砕石

可能性のあるものも含め、34点が出土している。通常みられる大きさのもの以外に、大型の礫を使用しているものもある。また、硯を転用したと考えられるものも数点含まれる。2点を図化した。

441はS X131出土のもので、両小口面を除く4面に使用痕があり、うち3面には溝状の磨り切り痕も残る。

442はS B201裏焼土面直上出土のもので、欠損しているが、残存部分については小口面や側面、表面、裏面に使用痕が認められる。

(3) 石臼（写真図版46）

2点出土している。第3遺構面ベース層および、S B402からの出土で、前者は上臼で、後者は下臼である。

第5節 転用石造物

計20点出土している。多くは一石五輪塔および五輪塔で、多いものは五輪等の火輪で、計6点出土している。また一石五輪等の火輪・水輪部分が1基、火水地輪部分が計2基出土している。

S X205では、一石五輪塔（火輪・水輪）と五輪塔（火輪3基）を組み合わせて使用している。後者は倒立させ、底面の平らな部分を上側としており、通路などの用途を想定している。

そのほか、S X315には五輪塔（火輪）、一石五輪塔、その他石造物が、S X354には五輪塔（水輪）が石組みの石材に転用されていた。S B302にも五輪塔（火輪）が転用され、またS X116には転用石かは断定できないが、切石が用いられていた。S B401内では加工石が出土している。その他の石造物の大半は遺構面を形成していたベース層や造成層から出土している。

第4遺構面造成層から出土した五輪塔の火輪には、4面とも、一字ずつ梵字が刻まれている。文字は、「**ト**（ラク）」、「**ニ**（ラ）」、「**ト**（ラー）」、「**ニ**（ラン）」であり、それぞれ北、東、南、西へと結界する意味をもつ。

第6節 煉瓦

東部で検出した瓦積井戸1の埋め土の中に刻印をもつ煉瓦を見出した。この煉瓦の刻印は、「ワ」に近い文字で、平手の両面のほぼ中央に刻まれている。煉瓦の法量は、22.8cm×10.8cm×6.0cmを測る。

神戸市内では、現存する異人館などの洋風建築の建築部材や、酒蔵群における各施設などに使用されたものが発掘調査の際に出土しており、これらの煉瓦に残された刻印などから、大阪府岸和田市や同貝塚市等で生産された煉瓦の資料が近年増加しつつある。当資料に残された刻印と同じ刻印は、現在のところ、神戸市内および近隣では確認されていないため、この刻印から产地を推定することはできない。



0 10cm

図53 出土煉瓦拓影

第7節 金属製品

兵庫津遺跡における町屋遺構の調査では金属製品の出土数が多く、今回の調査でも多くの出土を見ているが、刃物や釘などの鉄製品と煙管、錢貨など銅製品がそのほとんどを占める。図55に代表的なものを図示し、写真図版47～49に写真を掲載した。443～468、526、527が鉄製品、469～525、528が銅製品である。

443は全長23.5cm、刃幅5.6cmの菜切り包丁である。茎端部はやや斜めの一文字に仕上げている。444、445は片刃の出刃包丁である。444は先端のみの破片であるが、11.6cm以上の大型品、445は全長10.1cmを測る小型品である。446も片刃の包丁であるが、全長19.3cm以上で刃幅は3.2cmと細長い。

447、448は小柄である。447は柄が残る全長20.1cmの完形品である。柄の側面には草花文が彫金で表現される。448は全長19.8cmの小柄が刀身のみ出土している。

449～457は鉄釘で、449～452は船釘である。449、450は板の長辺同士を結合するための縫い釘、451、452は材平坦面を側面に結合するために用いられ、通り釘と呼ばれる。

458は鉄製の火箸である。横断面は径5.4mmを測る円形で、残存長17.5cmを測る。

459は金槌で、頭部片方が盤状を呈する。全長8.7cmで、1.8cm×7.7mmの柄穴が穿たれる。

460は握り鉄で、先端と把握部を欠損する。残存長5.2cmを測る。

461は鉄鍋の耳破片である。縁からの高さ1.8cmを測り、径8.2mmの弦掛け穴を穿つ。

463～465は釣針で、高さ2.4～2.6cm、ふところ（先端～軸間）1.2～1.3cmと規格性が認められる。

466～468は鉄釘であるが、錢文は何れも明らかでない。直径は2.7cm前後を測る。

469～471は銅煙管の雁首である。いずれも銅板を筒状にまいた胴に火皿を溶接している。469は比較的首の部分が長く、470、471と短くなる。これは編年での推移を表す属性である。

472～474は煙管の吸口で、それぞれ形状が異なる。

474には毛彫りと魚子打ちが施される。

475は簪で、頭部に扇形の飾りを表現している。

476は切羽で、挿入孔は長2.5cm×幅7.2mmを測る。

484は紅猪口で全体につぶれており、径2.9cm以上を測る。鉢と高台は別作りで、互いを輪により固定する。

486～489は用途不明の銅製品である。

490～525は銅錢である。錢文が分かるものについて遺構時期ごとの出土数を図54に示した。初期に使用されていた渡来銭から古寛永銭、新寛永銭と割合が変化する様子が看取できる。

また写真図版49に掲載したように、金属製品製作に関する、鉱滓（529～531）、取鍋（532）、輪羽口（533・534）、炉壁材（535～539）等の遺物も出土している。

表3 出土銅錢一覧（写真掲載分）

番号	出土施設	種類	年代（西暦）
490	第2遺構面ベース層	開元通寶	唐（621）
491	第2遺構面ベース層	開元通寶	唐（621）
492	第2遺構面ベース層	開元通寶	唐（621）
493	5月1日付土なし中	景雲二年	唐（711）
494	第2遺構面ベース層	祥符通寶	宋（960）
495	第2遺構面ベース層	祥符通寶	宋（960）
496	第2遺構面ベース層	天禧通寶	宋（1017）
497	第2遺構面ベース層	嘉祐通寶	宋（1059）
498	第2遺構面ベース層	治平通寶	宋（1069）
499	第2遺構面ベース層	元祐通寶	宋（1086）
500	第2遺構面ベース層	元祐通寶	宋（1086）
501	第2遺構面ベース層	熙寧通寶	宋（1068）
502	第2遺構面ベース層	熙寧通寶	宋（1078）
503	S.B.222面	大观通寶	宋（1086）
504	S.D.10.2.1上表面	熙寧通寶	宋（1078）
505	第2遺構面ベース層	熙寧通寶	宋（1078）
506	第2遺構面ベース層	熙寧通寶	宋（1078）
507	第2遺構面ベース層	熙寧通寶	宋（1078）
508	第2遺構面内	熙寧通寶	宋（1078）
509	現況内	熙寧通寶	宋（1078）
510	現況内	熙寧通寶	宋（1078）
511	現金中	熙寧通寶	宋（1078）
512	S.X.11.6.7.西側縁目中	熙寧通寶	宋（1078）
513	四脚馬面突出	熙寧通寶	宋（1078）
514	四脚馬面突出	熙寧通寶	宋（1078）
515	5月1日付土なし中	熙寧通寶	宋（1078）
516	5月1日付土なし中	熙寧通寶	宋（1078）
517	5月1日付土なし面上	熙寧通寶	宋（1078）
518	現地廻	熙寧通寶	宋（1078）
519	S.K.37	熙寧通寶	宋（1078）
520	第2遺構面内	熙寧通寶	宋（1078）
521	第2遺構面内	熙寧通寶	宋（1078）
522	第2遺構面内	熙寧通寶	宋（1078）
523	S.2.2.2	熙寧通寶	宋（1078）
524	現地廻	熙寧通寶	宋（1078）
525	第2遺構面ベース層	熙寧通寶	宋（1078）

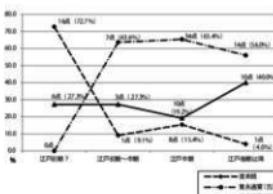


図54 時期別銅錢出土数

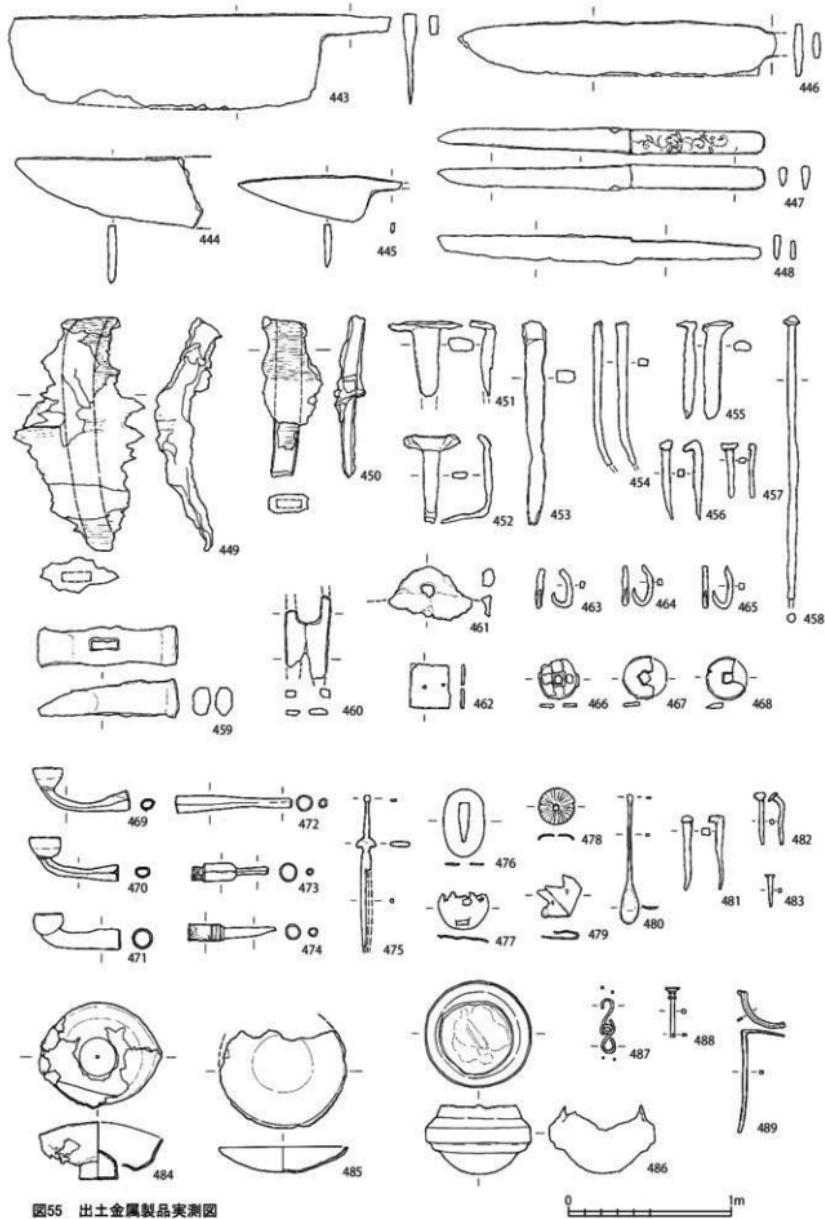


図55 出土金属製品実測図

第8節 兵庫津遺跡第69次調査から出土した動物遺存体

丸山真史（東海大学海洋学部）

1. 概要

兵庫津遺跡では第2次調査以来、第14次調査、第42次調査、第44次調査、第51次調査、第52次調査、第53次調査、第57次調査、第62次調査において、動物遺存体の出土が報告されている。これらの調査において豊富な出土量に恵まれたのは、遺跡のベースが砂層であるため有機物の保存状態が良いことに起因する。

第51次調査では中世の動物遺存体が、その他の調査では16世紀後半～幕末、近代までの近世・近代の動物遺存体が出土している。牛馬骨の加工や肉食の様相、トリガイの剥き身製造や雑魚の消費などの水揚げ地近郊の海産物消費の様相といった、兵庫津における町屋での動物利用が明らかになりつつある。

当調査も例外ではなく、町屋の調査では大量の貝類が出土しており、水産物利用について新たな知見がもたらされる。出土した動物遺存体は、破片数にして988点にのぼり、種類や部位を同定したものは、貝類が最多で384点、魚類255点、哺乳類25点、サンゴ類3点を数える（表4、5）。なお、種類不明の鳥類の上腕骨と思われるものが出土しているが、以下では記載を省略する。

動物遺存体は建物跡、土坑、埋桶、井戸などの遺構から出土しており、各時期の整地層などからの出土もある。共伴する土器類から江戸時代前期から明治期までのものと推定される。なお、町屋建築 S B305の土間において貝層が検出されたものをはじめ、これらの動物遺存体の大半は水洗選別を行って採集したもので、その他は調査中に目視により採集したものである。

2. 種類別の特徴

a) サンゴ類

キクメイシ科 瓦積井戸2から1点出土している。また、キクメイシ科と思われるものが、S B202上面焼土層、S X117から1点ずつ出土している。

b) 貝類

アワビ類 S K115、S K104、S X106、S B305から1点ずつ、計4点が出土している。S X106から出土した個体はクロアワビであり、その他は種の同定に至らない。いずれも破損しており、計測できないが、大きさに極端な大小は見られない。

キサゴ類 S X115から8点、S K112から1点、計9点が出土している。キサゴあるいはイボキサゴのいずれかである。

サザエ S X116から3点、S B305から2点、S K115、S X308、S B202から1点ずつ、計8点が出土している。

タニシ科 S B305土間貝層から89点、S X115から2点、計91点が出土している。大きさは、S B305土間貝層では、殻長約30～50mmの個体と30mmに満たない小型個体が混在し、S X115は小型個体のみである。

ウミニナ科 S B202上面焼土層から10点、S B202イロリ、S B305から1点、計12点が出土している。いずれも被熱した痕跡はみられない。

表4 種名表

刺胞動物門 Cnidaria	ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.
虫虫綱 Anthozoa	ウツボ科 <i>Muricidae</i>
イシサンゴ目 Scleractinia	ウツボ属の一種 <i>Gymnothorax</i> sp.
キクメイシ属の一種 <i>Favilina</i> fam., gen. et sp. indet.	ニシン目 Clupeiformes
軟体動物門 Mollusca	ニシン科 Clupeidae
腹足綱 Gastropoda	マイワシ <i>Sardina mellostictus</i>
古腹足目 Vetigastropoda	ニシン科の一種 Clupeidae gen. et sp. indet.
ミミガイ科 Hiliotidae	カサゴ目 Scorpaeniformes
ミミガイ属の一種 <i>Hiliotilla</i> gen. et sp. indet.	オニオコゼ科 Syngnathidae
ニシキウズガイ科 Trochidae	オニオコゼ属の一種 <i>Inimicus</i> sp.
ニシキウズガイ属の一種 <i>Trochidea</i> gen. et sp. indet.	コチ科 Platyccephalidae
サザエ科 Turbinidae	コチ科の一種 Platyccephalidae gen. et sp. indet.
サザエ <i>Turbo cornutus</i>	スズキ目 Percidae
鰐足目 Diopoda	スズキ科 Percichthyidae
タニシ科 Viviparidae	スズキ属 <i>Latesniloticus</i> sp.
タニシ属の一種 <i>Viviparidae</i> gen. et sp. indet.	マダライ科 Malacanthidae
ウミニア科 Batillariidae	アマダイ属の一種 <i>Bramaichthys</i> sp.
ウミニア属の一種 <i>Batillariidae</i> gen. et sp. indet.	アジ科 Carangidae
タマガイ科 Naticidae	アリ属の一種 <i>Seriola</i> sp.
ツメタガイ <i>Glossularia didyma</i>	アジ科の一種 <i>Caranx</i> gen. et sp. indet.
トウカムリ科 Cassidae	イサキ科 Ismamilidae
ウラシマガイ <i>Semicassis sulcata</i>	ヒグマ属の一種 <i>Haploblepharus</i> sp.
新腹足目 Neogastropoda	タイ科 Sparidae
アツカガイ科 Muricidae	マダイ <i>Pagrus major</i>
アカニシ <i>Rapanus venosa</i>	タイ科の一種 <i>Sparidae</i> gen. et sp. indet.
エゾバイ科 Buccinidae	キヌ科 Sillaginidae
ハイ <i>Babylonia japonica</i>	キヌ属の一種 <i>Sillago</i> sp.
テンダニシ科 Melongenidae	インダシ科 Oplegnathidae
テンダニシ <i>Hemifusus tuba</i>	インダシ属の一種 <i>Oplegnathus</i> sp.
斧足綱 Bivalvia	ベラ科 Labridae
フネガイ科 Arcidae	ベラ科の一種 <i>Labridae</i> gen. et sp. indet.
フネガイ <i>Arcidae</i>	タチウオ科 Trichiuridae
アカガイ <i>Sephareca broughtonii</i>	タチウオ科の一種 <i>Trichiuridae</i> gen. et sp. indet.
フネガイ属の一種 <i>Arcidae</i> gen. et sp. indet.	サバ科 Scombridae
タマキガイ科 Glycymerididae	サバ属の一種 <i>Scomber</i> sp.
タマキガイ <i>Glycymeris vestita</i>	カレイ目 Pleuronectiformes
カキ目 Ostreidae	ヒラメ科 Bothidae
イタボガキ科 Ostreidae	ヒラメ科の一種 <i>Bothidae</i> gen. et sp. indet.
イタボガキ <i>Ostrea denselamellosa</i>	カレイ科 Pleuronectidae
マガキ <i>Cassostrea gigas</i>	カレイ科の一種 <i>Pleuronectidae</i> gen. et sp. indet.
イタボガキ科の一種 <i>Ostreidae</i> gen. et sp. indet.	ウシノシタ科 Cynglossidae
イシガイ目 Unionida	ウシノシタ科の一種 <i>Cynglossidae</i> gen. et sp. indet.
イシガイ科 Unionidae	フグ科 Tetradontidae
イシガイ属の一種 <i>Unionidae</i> gen. et sp. indet.	カワハギ科 Monacanthidae
マルスダレガイ目 Venerida	カワハギ科の一種 <i>Monacanthidae</i> gen. et sp. indet.
ザルガイ科 Cardiidae	フグ科の一種 <i>Tetradontidae</i> gen. et sp. indet.
トリガイ <i>Fulvia mutica</i>	フグ科の一種 <i>Tetradontidae</i> gen. et sp. indet.
バカガイ科 Macridae	哺乳類 Mammalia
シオフキ <i>Macrae veneriformis</i>	食肉目 Carnivora
シジミ科 Corbiculidae	イス科 Canidae
ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i>	イス <i>Canis familiaris</i>
マルスダレガイ科 Veneridae	ネコ科 Felidae
アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	ネコ <i>Felis catus</i>
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	齧歯目 Rodentia
脊椎動物門 Vertebrata	ネズミ科 Muridae
軟骨魚綱 Chondrichtyes	ネズミ科の一種 <i>Muridae</i> gen. et sp. indet.
板鰓腔綱の一種 <i>Elaeodanchilia</i> , order, fam., gen. et sp. indet.	クジラ目 Cetaceas
トビエイ目 Myliobatiformes	クジラ目の一種 <i>Cetaceas</i> fam., gen. et sp. indet.
トビエイ上科の一種 <i>Myliobatoides</i>	
硬骨魚綱 Osteichthyes	
ウナギ目 Anguilliformes	
ハモ科 Muraenidae	

ツメタガイ S X116から16点、S X308から7点、S B305から4点、S B202イロリ、第3遺構面ベース層から2点ずつ、SK112、SK113から1点、計33点が出土している。計測できた個体はS B305から出土したもので、殻長24.3mm、28.4mm、39.9mm、51.5mmと小型個体が多い。また、S X116のものは、計測はできないが、いずれも小型個体である。

ウラシマガイ 第3遺構面ベース層から1点のみ出土している。

アカニシ S E103から4点、S B305、第4遺構面ベース層から2点ずつ、SK101、S X120、SK121、SK301、S B202上面焼土層、S B204カマド、S X316、第4遺構面造成層から1点ずつ、計16点が出土している。破損しているものが大部分であり、計測できたものはないが、殻高はおおよそ100mm前後ないしそれ以上で、それより小型のものが1点のみある。

バイ S B305、S X308から2点ずつ、S B201上面焼土層から1点、計5点が出土している。

テングニシ SK109から2点、S X308、第4遺構面造成層から1点ずつ、計4点が出土している。

マイマイ類 カタツムリの仲間である。S X115から1点のみ出土している。

アカガイ S E103、S B305から1点(左)ずつ、計2点が出土している。

タマキガイ S B305から2点(左1右1)が出土している。

イタボガキ 第4遺構面造成層から3点(左2右1)、S B305から2点(左1右1)、S B202上面焼土から1点(左)、計6点が出土している。

マガキ 第3遺構面ベース層から2点(右)、S X308から7点(左3右4)、S B305から5点(左1右4)、計14点が出土している。

イタボガキ科 S B305から7点(左3右4)、S B202上面焼土層から5点(左3右2)、S X122(右)から2点、S X308(右)、S X120(右)、S B201上面整地層(右?)、S B204焼土面直上(右)、第3遺構面ベース層(左右不明)、第4遺構面造成層(右)から1点ずつ、計20点が出土している。

イシガイ科 S B305から3点(左2不明1)が出土している。

トリガイ S B305土間貝層から47点(左22右25)、S B202上面焼土層から12点(左6右6)、第3遺構面ベース層(左)、SK312(左)から1点ずつ計61点が出土している。

シオフキ S X113から1点(右)が出土している。

ヤマトシジミ S B305土間貝層から60点(左23右35不明2)、S X122から2点(左1右1)、S X308(左右不明)、S B201上面整地層(右)、SK117(右)から1点ずつ、計65点が出土している。

アサリ 瓦積井戸6から1点(右)が出土している。

ハマグリ SK112から5点(左2右3)、S X308(左1右3)、S B305土間貝層(左1右3)から4点ずつ、S X122(左2右1)、瓦積井戸6(左2右1)から3点ずつ、SK104から2点(左)、S X120(左)、第3遺構面ベース層(左)から1点ずつ、計23点が出土している。

c) 魚類

トビエイ科 S X116下層から歯板が1点出土している。

トビエイ上科 S X114から尾棘が1点出土している。

エイ・サメ類 すべて椎骨であり、SK103から122点、S X114から7点、SK109から2点、S X316、第4遺構面ベース層、第4遺構面造成層から1点ずつ、計134点が出土している。いずれも椎体径10mm以下の小型個体である。

ハモ属 S B202上面焼土から歯骨（右）1点、S K111から椎骨2点、歯骨（左）1点、S X112から椎骨5点、S X114から椎骨3点、前頭骨1点、S X116下層から歯骨（右）1点、計14点が出土している。大きさは、S B202上面焼土の1点、S K111の2点、S X114の1点は体長50cm以下、それ以外は50cm以上と推定される。

ウツボ属 中央部西端整地層から歯骨（右）が1点出土しており、体長100cm以下である。

マイワシ S K109から主上顎骨（左）、S X112から舌顎骨（右）が1点ずつ、計2点が出土している。S K109の1点は体長20cm以下、S X112の1点は体長20cm前後と推定される。

ニシン科 S K109から椎骨1点、S X112から椎骨6点、計7点が出土している。大きさは、S X112の4点は体長20cm前後、それ以外は20cm以下と推定される。

コチ科 S B202イロリから歯骨（左）1点、S B202焼土面上から角骨（左）1点、整地層から歯骨（右）1点、S K103から椎骨4点と歯骨（左）1点、S K112から主上顎骨（右）1点、S X104から歯骨（右）1点、S X112から主上顎骨（左）1点、S X114から椎骨と主上顎骨（左）1点ずつ、S X116下層から歯骨（左）1点、計14点が出土している。大きさは、S K112の1点は体長50cm以上の大型個体、S K103、S X112、S X116の1個体ずつが体長20~30cm、S B202焼土面上の1点は体長40~50cm、その他の9点は体長30~50cmと推定される。

オニオコゼ属 S X114から方骨（右）、第3遺構面基盤層から歯骨（右）が1点ずつ、計2点が出土している。大きさは、いずれも体長20~30cmと推定される。

アマダイ属 S X114から主上顎骨（左）が1点出土しており、体長30~40cmと推定される。

ブリ属 S K109から角骨（左）1点が出土しており、体長70~80cmと推定される。

アジ科 S X112から椎骨が1点出土しており、体長20~30cmと推定される。

ヒゲダイ属 中央部西端地区の江戸時代中期の整地層から前上顎骨（左）1点が出土しており体長20~30cmと推定される。

クロダイ属 S B202イロリから歯骨（左）、S K103から前上顎骨（右）、S X106から前上顎骨（左）が1点ずつ、計3点が出土している。大きさは、S B202イロリの1点は体長30cm程度、その他は体長20~30cmと推定される。

マダイ S D501から神経頭蓋、S K109から前上顎骨（左）、口蓋骨（右）、椎骨、S K120から主鰓蓋骨（右）、S X113から前頭骨、S X114から主上顎骨（右）、S X116下層から前鰓蓋骨（右）が1点ずつ、計8点が出土している。大きさは、S X113の1点は体長20cm前後であるが、それ以外は30cm以上であり、S X114の1点は60cmを超える大型個体である。

タイ科 いずれも頸骨から遊離した歯であり、S K103から8点、S X103から3点、S X112、S X120から1点ずつ、計13点が出土している。

キス属 S K111から椎骨2点が出土しており、体長10~20cmと推定される。

イシダイ属 S X116から前上顎骨（右）が1点出土しており、体長30~40cmと推定される。

ベラ科 S X112から下咽頭骨、S X114から歯骨（右）が1点ずつ、計2点が出土している。いずれも体長20cm以下の小型個体である。

タチウオ科 S X114から歯骨（右）1点が出土しており、大きさは50cm以下と推定される。

サバ属 S X104から椎骨1点が出土しており、体長30~40cmと推定される。

ヒラメ科 中央部西端地区の江戸時代中期の整地層から主上顎骨（左）1点が出土している。

カレイ科 S K103から椎骨2点、S K109から椎骨1点、S X114から椎骨4点、尾舌骨1点、S X119から椎骨1点、S X125から方骨（左）1点、計10点が出土している。大きさは、S K

103の2点、S X125の1点が体長20cm以上の大型個体、その他は体長20cm未満の個体である。ウシノシタ科 S X114から椎骨5点、S X101から椎骨1点、S K111から椎骨1点、計7点が出土している。

カワハギ科 S X116下層から第1背鱗棘が1点出土しており、体長20~30cmと推定される。

フグ科 第3遺構面ベース層から前上顎骨(右)1点、S B202イロリから椎骨と前鰓蓋骨(左)が1点ずつ、S B202炭層上面から前鰓蓋骨(右)1点、S B202上面焼土層から神経頭蓋、歯骨(右)、角骨(右)、方骨(右)、前鰓蓋骨(左)1点ずつ、S K103から前上顎骨/歯骨1点、S K109から前上顎骨/歯骨2点、前上顎骨(右)1点、S K110から前上顎骨(左)1点、S K120から綱翼状骨(右)1点、S X114から前上顎骨/歯骨3点、前上顎骨(左)2点、椎骨、歯骨(左)、舌顎骨(左)、主鰓蓋骨(右)1点ずつ、S X116から前上顎骨/歯骨2点、S X116下層から歯骨(左1右2)3点、前上顎骨(左1右1)2点、方骨(左)、椎骨1点ずつ、計33点が出土している。大きさは、S X116では体長30cm前後の個体が大部分であるが、S K103、S K109では体長20cm以下の小型個体が、S K109では体長40cm以上の大型個体が出土している。

d) 哺乳類

ヒト S X112から、遊離歯が1点出土している。

イヌ 調査区中央部中央で検出した街路から、脛骨(左2右1)3点、椎骨、上腕骨(左1右1)、寛骨(左1右1)、大腿骨(左1右1)が2点ずつ、肩甲骨(左)、計12点が出土している。脛骨、上腕骨、寛骨、大腿骨の左右1点は、同一個体のものと考えられる。

ネコ S B202末面から肩甲骨(左)、S K110から上腕骨(左)1点ずつ、計2点が出土している。S K110の上腕骨は両端が癒合していない幼獣である。

ネズミ科 S B201イロリから大腿骨(左)、脛骨(左)が1点ずつ、S K109から脛骨(左)1点、遊離歯(上顎切歯、下顎M1)2点、椎骨、尺骨、距骨(右)が1点ずつ、計8点が出土している。S B201イロリから出土している大腿骨は、遠位端が癒合していない若獣である。

クジラ目 第4遺構面造成層から下顎骨と橈骨と思われるものが1点ずつ、計2点が出土している。

3. 骨角製品

擬餌針と思われるものが、S B202から1点出土している(図56-540)。軸部の素材は、ニホンジカの枝角の先端部を使用し、両端を切断する。断面円形の棒状を呈し、最大長約6.4cm、最大径1.2cmを測る。針は鉄製であり、破損しているが、装着状態を保持する。鉄錆の析出によって膨張し、茎に亀裂が生じる。基部には紐通し孔が穿たれ、最小径約0.4cmを測る。兵庫津遺跡第57次調査で類似品が出土している(丸山2014)。

鈎が、S X114から1点出土している。骨製か鹿角製のいずれかの同定は困難である(図56-541)。破損して半円形を呈するが、元来は正円形であろう。最大径約1.6cmを測る。

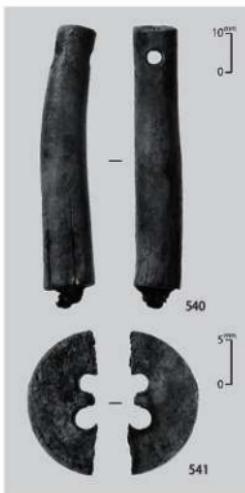


図56 出土骨角製品

2箇所に穿孔があり、孔径はそれぞれ約0.3cm、0.2cmを測る。

骨製と思われるヘラ状製品が、S X104から1点出土している。破損した小片であり、全体形は不明である。

4. 動物利用の特徴

当調査では、サンゴ類、貝類、魚類、哺乳類などが出土している。サンゴ類は少量であるが、キクメイシの仲間である。兵庫津遺跡では、他の調査地点でも少量ずつであるが、頻繁に出土する。漢方などに利用された可能性もあるが、表面の風化により切削痕などは明確ではない。哺乳類はイヌ、ネコ、ネズミ科といった食用とは考えられないもの以外に、鯨類の出土がある。鯨類はイルカよりも大きく、小型のクジラと推測される。瀬戸内海にも小型のクジラが進入することはあるが、兵庫津の近海での捕鯨によるものか定かではない。

貝類や魚類の大部分は食用となるものであり、従来の調査で出土している種類ばかりである。魚類は埋桶SK103で、大量のエイ・サメ類の椎骨が出土している。同一個体のものが多く含まれると推測され、消費量が特別に多かったとは考えにくい。

これまでの調査成果では、兵庫津遺跡における水産物利用の最大の特徴は、町屋でトリガイを集中的に廃棄し、剥き身を製造していたと考えられることである。第14次調査では、京都や大阪などの近世都市に一般的な屋敷地とは性格が異なる廃棄物が含まれていることや、トリガイの剥き身製造により生じた廃棄物であることが指摘される(丸山2012、丸山・松井2010)。また、第62次調査では、町屋の一角でトリガイの貝溜まりが形成され、最大規模の貝溜まりでは最小個体数にして429個体、破片重量は約12kgと一般家庭における食料残滓とは考えにくく(丸山2017)、水揚げ地における商品生産と推察される。

当調査においても多数の貝類が出土しており、トリガイの出土量は破片総数では2番目に多く、江戸時代前期から中期の町屋建物SB305の土間貝層で集中的に出土している。最小個体数で25個体(約1.4kg)を数え、第14次調査、第62次調査に比べて出土量は少ない。トリガイが利用されたことは明らかであるが、一般家庭における廃棄量とみることもできる。しかしながら、後述するようにSB305土間貝層の貝類は、一般的な食料残滓と即断することはできない。

SB305土間貝層では、タニシ科、トリガイのほかには、ヤマトシジミ35個体、マガキ、イタボガキを含むイタボガキ科9個体、ツメタガイ4個体、ハマグリ3個体など、17種類を同定している(図2)。種類は豊富であり、食用となる貝種で構成される。最も多く出土したのはタニシ科であり、89個体が出土している。兵庫津遺跡では、これまでにもタニシ科は出土しているが、当調査のように大量かつ集中的な出土例はない。タニシ科は食用となるが、兵庫津遺跡において食用貝類の主要な位置を占めることはない。出土したタニシ科の大きさは、殻長30~50mmの個体が多いが、食用に適さない小型個体も混在しており、大きさの選別は徹底されていないことも特徴的である。また、一定量の動物遺存体が出土している他の町屋建物や廃棄土坑では、魚類が出土しているが、SB305土間貝層はフライを用いて貝層土壤を水洗選別したにもかかわらず、貝類以外の動物種はみられない。以上にみると、貝殻のみの集積である。

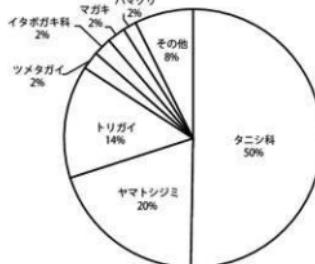


図57 SB305土間貝層の貝種組成
(MN1=177)

こと、食用として重要種とは考えられないタニシ科の大量出土かつ小型個体が混在することは、単なる食料残滓の廃棄とは考えにくい。

大阪府堺市の堺環濠都市遺跡では、中世末から近世初頭の埠列建物が出土しており、防湿を目的として床下に貝殻を敷き詰めたとされ、SKT959地点の埠列建物のハマグリの破損率は高く、防湿効果を高めるため碎いたことが指摘される（池田2008）。今回の兵庫津遺跡の調査では、町屋建物の土間の表面に敷き詰められたものではなく、帯状に分布しており、破損も著しくないことから（P48参照）、防湿効果とは別の目的による土間構築時の意図的な貝殻利用が想定される。

5.まとめ

当調査では、サンゴ類、貝類、魚類、哺乳類などが出土しており、それらの多くは食料残滓と考えられる。そのようななかで、町屋建物S B305の土間で検出された貝層が特筆された。タニシ科を中心として、トリガイ、ヤマトシジミ、カキ類、ツメタガイなど兵庫津遺跡で一般的な食料残滓を含む貝種で構成される。兵庫津遺跡の既往の調査ではタニシ科が組成の主となる地点はなく、当地点の最大の特徴である。土間の構築に際して、薄い貝層を形成した目的は明らかではないが、兵庫津における食利用以外の貝類の用途を窺える意義深い資料である。また、骨角製品のなかには鹿角製の擬餌針と思われるものがあり、兵庫津遺跡では本資料が2例目となり、近世の漁業を考えるうえで貴重な資料であり、今後のさらなる漁具の吟味が期待される。

参考文献

- 池田研2008「SKT959地点出土の貝類」『堺環濠都市遺跡I（SKT959地点）』大阪府文化財センター pp.149-152
丸山真史2012「近世の兵庫津における水産物利用」『ビオストーリー』vol.17生き物文化誌学会 pp.86-99
丸山真史2014「兵庫津遺跡第57次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 pp.97-108
丸山真史2017「兵庫津遺跡第62次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 pp.243-258
丸山真史・松井章2010「兵庫津遺跡第14次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』
第1分冊 神戸市教育委員会 pp.353-386

表5 出土動物遺存体集計表

○は破片を示す

江戸前期?	大分類	小分類	部位	左	右	-
漢SD 501	魚類	マダイ	神經頸蓋	1		
		アワビ類?	殻		○	
		アカニシ	殻		1	
		ツメタガイ	殻		2	
		ウラシマガイ	殻		1	
		鰐貝	殻		1	
		マガキ	殻	2		
		イタボガキ科	殻		1	
		イタボガキ科?	殻		1	
		トリガイ	殻	1		
		トリガイ?	殻		○	
		フネガキ科?	殻		○	
		ハマグリ	殻	1		
		オニオコゼ属	歯骨	1		
		フグ科	前上顎骨	1		
		不明	上擬頸骨	1		
			不明	2		
			鰐		○	
		貝類	アカニシ	殻	2	
		魚類	エイ・サメ類	椎骨		
			アカニシ	殻	1	
			テングニシ	殻	1	
			イタボガキ	殻	2 1	
			イタボガキ科	殻	1	
			エイ・サメ類	椎骨		
			アカニシ	殻	1	
			ハマグリ	殻	1	
			クジラ類	機骨?		
				機骨?	1	
江戸前～中期	大分類	小分類	部位	左	右	-
土坑SK 301	貝類	アカニシ	殻		1	
土坑SK 312	貝類	トリガイ	殻	1		
		サザエ	蓋		1	
		ツメタガイ	殻		7	
		テングニシ	殻		1	
		バイ	殻		2	
		巻貝	殻		1	
		マガキ	殻	3 4		
		イタボガキ科	殻		1	
		ハマグリ	殻	1 3		
		ヤマトシジミ	殻		1	
		貝類	アカニシ	殻	1	
		魚類	エイ・サメ類	椎骨		
			アワビ類	殻	1	
			サザエ	殻	2	
			ツメタガイ	殻	4	
			タニシ科	殻	89	
			ウミニア科	殻	1	
			ヒサゴウ	殻	1	
			アカニシ	殻	2	
			バイ	殻	2	
			アカガイ	殻	1	
			イシガイ科	殻	2	
			マガキ	殻	1 4	
			イタボガキ	殻	1 1	
			イタボガキ科	殻	3 4	
			タマキガイ	殻	1 1	
			トリガイ	殻	22 25	
			フネガイ科	殻		○
			ハマグリ	殻	1 3	
			ヤマトシジミ	殻	23 35 2	
			上腕骨	1	1	
			大顎骨	1	1	
			寛骨	1	1	
			椎骨		2	
			肩甲骨	1		
			脛骨	2	1	
			不明	肋骨?		
江戸後～幕末	大分類	小分類	部位	左	右	-
井戸?SK 110	魚類	マガキ	不明			○
井戸?SK 110	魚類	フグ科	前上顎骨	1		
井戸?SK 110	貝類	トリガイ	殻			○
井戸内	哺乳類	トリガイ	機骨			
		ネコ	上腕骨	1		
土坑SK 101	貝類	アカニシ	殻			
		テングニシ	殻		2	
		フネガイ科	殻			○
		エイ・サメ類	椎骨		2	
		マイワシ	主上顎骨	1		
		ニシン科	椎骨		1	
		ブリ属	角骨	1		
			前上顎骨	1		
		マダイ	口蓋骨	1		
			椎骨		1	
		タイ科?	舌帶骨		1	
		カレイ科	椎骨		1	
		フグ科	前上顎骨	1		
			前上顎 / 脊骨		2	

○は破片を示す

土坑SK 109	魚類	不明	椎骨 鱗	3 1	石組SK 104	貝類	アワビ類 ハマグリ	殻 殻	1 2	
	哺乳類	ネズミ科	脛骨	1		貝類	ツメタガイ キサゴ類	殻 殻	1 1	
土坑SK 111	貝類	不明	不明	1	石組SK 112	貝類	ハマグリ サンゴ	殻 キクメイシ科	1 1	
		春貝	殼	1		貝類	コチ科 ヤマトシジミ	主上顎骨 殻	1 1	
	魚類	トリガイ	殼	1	石組SK 117	魚類	コチ科 サンゴ	主上顎骨 キクメイシ科	1 1	
		ハモ属	椎骨 衝骨	2 1		貝類	ヤマトシジミ			
		スズキ属?	椎骨	1		魚類	ウシノシタ科	椎骨	1	
		キス属	椎骨	2		目類	クロアワビ		1	
		ウシノシタ科	椎骨	1		魚類	クロダイ属	前上顎骨	1	
	魚類	ハモ属	椎骨 衝骨	4	石組SX 112	魚類	ハモ属 マイワニ ニシン科	椎骨 椎骨	5 6	
		スズキ属?	椎骨	1		貝類	コチ科 アジ科	主上顎骨 椎骨	1 1	
		キス属	椎骨	2		魚類	タイ科 ベラ科	追蹤齒 下頬歯骨	1 1	
	魚類	ウシノシタ科	椎骨	1		貝類	カレイ科?	椎骨	2	
		ハモ属	椎骨	4		魚類	不明	動骨 鱗	2 1	
		不明	主上顎骨 主鰓蓋骨	1 1		哺乳類	ネズミ科	尺骨 追蹤齒	1 2	
土坑SK 113	貝類	ツメタガイ	殼	1		貝類	ヒト		1	
土坑SK 115	貝類	アワビ類	殼	1		魚類	トビエイ科	尾棘	1	
土坑SK 120	魚類	サザエ	殼	1		エイ・サメ類	椎骨		7	
		マダイ	主鰓蓋骨	1		ハモ属	前頭骨		1	
	魚類	フグ科	後翼状骨	1		魚類	ハモ属	椎骨	3	
		不明	鰓蓋骨?	1		貝類	コチ科	主上顎骨	1	
土坑SX 113	貝類	シオフキ	殼	1		魚類	オニコゼ属	椎骨	1	
土坑SX 116	魚類	マダイ	前頭骨	1		貝類	マダイ	主上顎骨	1	
土坑SX 116 下層	貝類	サザエ	蓋	1		魚類	タチウオ科	椎骨	1	
		ツメタガイ	殼	6		貝類	ベラ科	椎骨	1	
	魚類	フグ科	前上顎/ 鰓骨	2		魚類	アマダイ属	主上顎骨	1	
		不明	鰓蓋骨?	1		貝類	サバ属?	椎骨	1	
	貝類	サザエ	蓋	3		魚類	ウシノシタ科	椎骨	5	
		トビエイ科	板骨	1		貝類	カレイ科?	尾舌骨	1	
	魚類	ハモ属	衝骨	1		魚類	カレイ科	椎骨	4	
		コチ科	衝骨	1		貝類	不明	主鰓蓋骨	1	
	魚類	マダイ	前鰓蓋骨	1		魚類	前上顎骨	前上顎骨	2	
		イシダイ属	前上顎骨	1		貝類	フグ科	前上顎/ 鰓骨	3	
土坑SX 119	魚類	カワハギ科	第1背鰭棘	1		魚類	カレイ科	椎骨	1	
土坑SX 120	貝類	トビエイ科	前上顎骨	1		魚類	アカニシ	椎骨	1	
		ハモ属	方骨	1		魚類	イタボガキ科	椎骨	1	
	魚類	コチ科	椎骨	1		貝類	ハマグリ	方骨	1	
		マダイ	衝骨	1		魚類	タチウオ科	椎骨	1	
土坑SX 122	貝類	イシダイ属	前鰓蓋骨?	1		貝類	ベラ科	椎骨	1	
		カワハギ科	第1背鰭棘	1		魚類	アマダイ属	方骨	1	
	貝類	ハマグリ	方骨	1		貝類	サバ属?	椎骨	1	
		ヤマトシジミ	殼	1		魚類	ウシノシタ科	椎骨	5	
埋桶SK 103	魚類	エイ・サメ類	椎骨	122	石組SX 114	貝類	カレイ科?	尾舌骨	1	
		コチ科	椎骨	4		魚類	アカニシ	殼	8	
		クロダイ属	衝骨	1		貝類	イタボガキ科	殼	2	
		タイ科?	前上顎骨	1		魚類	ハマグリ	殼	1	
		カレイ科?	椎骨	1		貝類	マイマイ類	殼	1	
		フグ科	前上顎/ 鰓骨	1		魚類	トリガイ	殼	1	
		不明	椎骨	133		貝類	エイ・サメ類	椎骨	1	
		アカニシ	殼	1		魚類	不明	鱗	1	
		タイ科?	追蹤齒	1		貝類	サンゴ	キクメイシ科?	1	
		不明	鱗	1		魚類	石組SX 115	カレイ科	方骨	1
埋桶SK 121	貝類	アカニシ	殼	1		貝類	サンゴ	カレイ科?	1	
埋桶SX 103	魚類	タイ科?	追蹤齒	1		魚類	石組SX 117	カレイ科	前鰓蓋骨	1
埋桶SX 104	魚類	コチ科	衝骨	1		貝類	石組SX 125	不明	椎骨	2
井戸SE 103 石組内	貝類	サバ属	椎骨	1		魚類	瓦積井戸2内	サンゴ	キクメイシ科?	1
		アカニシ	殼	4		貝類	瓦積井戸6	アシリ	アシリ	1
		テンゲニシ?	殼	1		魚類	瓦積井戸6	ハマグリ	殼	1

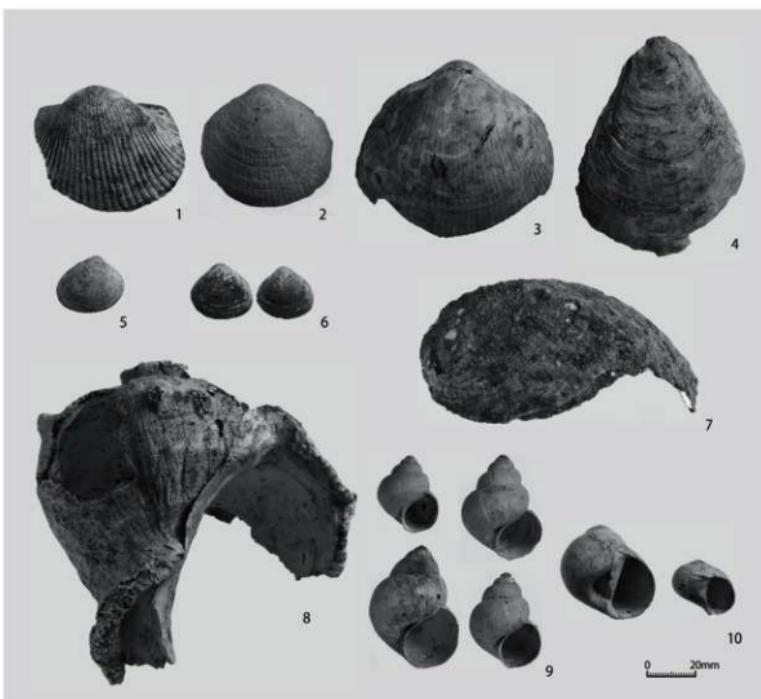


写真 84 1:アカガイ 2:タマキガイ 3:トリガイ 4:マガキ 5:ハマグリ
出土貝類 6:ヤマトシジミ 7:クロアワビ 8:アカニシ 9:タニシ科 10:ツメタガイ

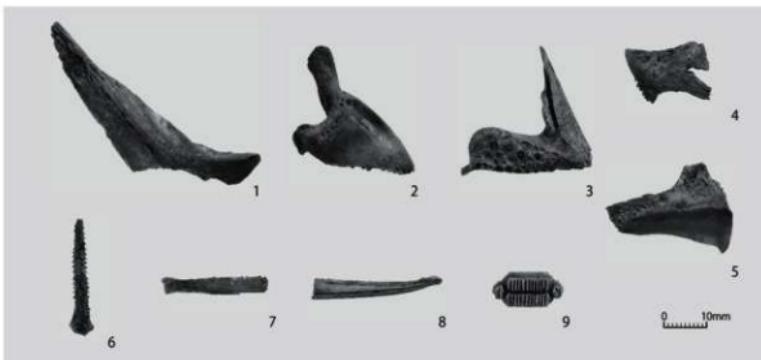


写真 85 1:マダイ前鰓蓋骨 2:イシダイ科前上顎骨 3:クロダイ前上顎骨 4:フグ科歯骨
出土魚類 5:フグ科前上顎骨 6:カワハギ科背鰭棘 7:コチ科歯骨 8:ハモ属歯骨
9:トビエイ科歯板

第4章　まとめ

第1節　遺構について

今回の調査地は、兵庫津の中でも新在家町の北東部に位置すると考えられる。新在家町は、慶長7年〔1602〕の『摂州矢田郡兵庫屋地子帳』に記載があり、そこに記されている石盛が他所に比べて高く、生産力をもつ地区であることが窺える。また江戸時代、新在家町を中心とする一帯は、浜本陣と呼ばれる兵庫津独自の商形態を持つ商家が集まっていたことが知られている。

また周辺の街路や町並みの様子については、現存する元禄9年〔1696〕に作成された『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』⁽¹⁾（以下、『元禄絵図』）に現在の地図との対比に耐えうる高い精度で描かれている。また町内の土地の所有関係については天保9年〔1836〕作成（以後加筆）の『新在家町水帳絵図』⁽²⁾（以下、『水帳絵図』）に克明に記されている。街路などを手掛かりとして調査区とこの水帳絵図の位置関係の照合については、巻頭図版6に示したとおりである。

なお、今回『元禄絵図』と『水帳絵図』の照合を行った際、『元禄絵図』において新在家町として描かれ（色塗りされ）ている部分のうち、新在家町西半部分で「御屋敷」の濠の南側を並行する街路の北側が存在しない可能性が高いことが判明した（図58）。兵庫津の海沿いの地区「浜方」の町は街路を挟む両側町となっている場合が多く絵図の作成過程で間違って記載されたのかもしれない。

一方、今回の発掘調査の成果としては、北に隣接する第62次調査に引き続き兵庫城周辺の町屋群に伴う遺構および遺物を確認することができた。特に第2遺構面では、調査区中央部付近において良好な焼土層および焼土面を検出することができたため、街路や町屋群およびこれに付随する生活関連遺構を調査することができた。

今回の第69次調査地区で検出された焼失町屋群の年代はや焼土層の時期については、S B201の出土遺物などから概ね18世紀前半が想定できる。この時期の焼土層は第62次調査では、確認できておらず周辺地域での遺構を検討する上で貴重な資料といえよう。

周辺地区的町屋域に関する調査成果の検討については、すでに平成28年度に刊行された『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』⁽³⁾の「第8章まとめ」において試みた。重複する部分もあるが、本調査の新たな成果も加えてここで再度確認のため整理して本書のまとめとしたい。

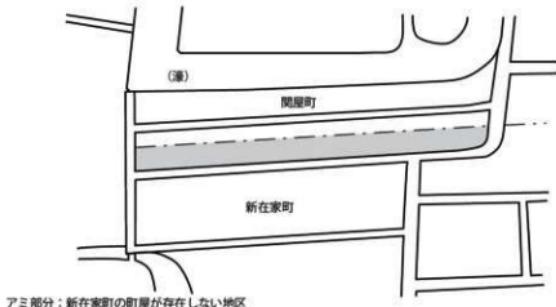


図58 『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』にみられる関屋町・新在家町の表示（原典を基にした略図）

なお、町屋群の造構については、主に詳細な観察が可能であった第2造構面の町屋群を中心としてみていくながら、他の造構面については特徴的なものを随時取り上げることとする。

検出した町屋建物のうちSB201およびSB202は、街路の西側に面して、SB203とSB204は街路の東側に面して建てられている。また北側には搅乱を挟むものの土間部分の広がりなどからSB201とSB202、SB203とSB204は壁を接するように密接して町屋が存在していたと考えられる。一方SB205とSB206は、1本西を走る南北方向の街路に面しており、2軒はやはり密接して建てられている。このように確認された町屋群は、街路に間口が取付き、隣同士の建物が密接する形態をとるもので、街路や屋地割りの方向などについても、絵図との照合の結果ほぼ齟齬をきたさないものであった。ただSB203の裏（東）側で屋地が東に向かい大きくスロープ状に傾斜して下がっており、同一時期の屋敷地の高さについては、同一の町内に

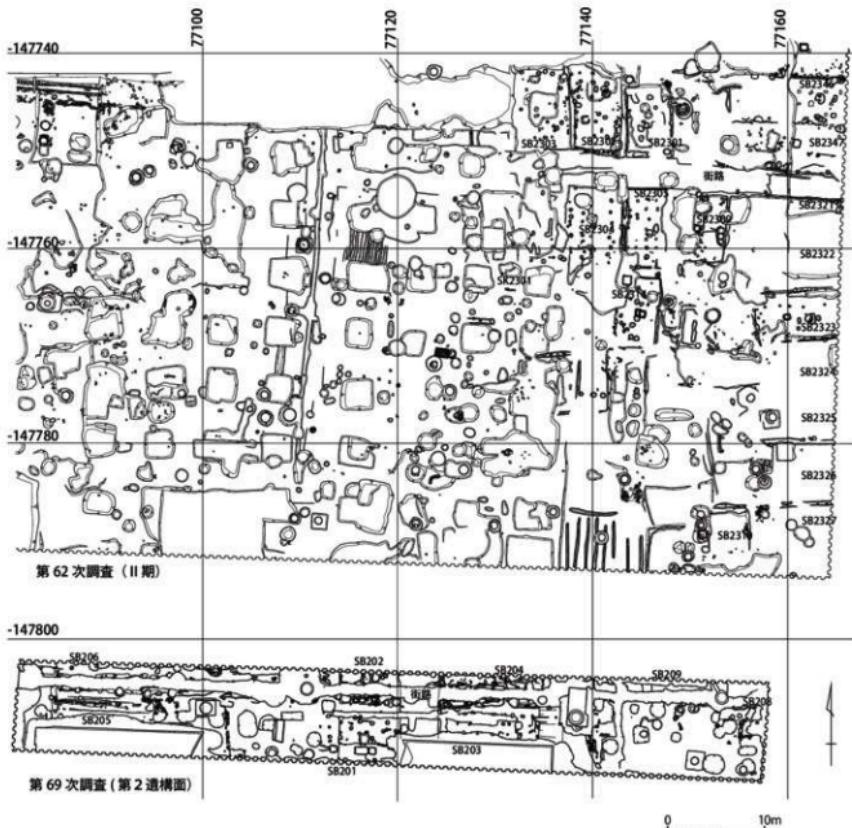


図59 第62次調査・第69次調査町屋平面図

おいてもかなり高低差があったと考えられる。残された絵図からは把握できない、立体的な配置についても知ることができた。

さらに今回、このS B205・S B206とS B201との屋敷地の境と考えられる部分において、石列が認められた。屋敷地の裏どうしの境界にこのような石列が明確に確認できたことは、今回初めてであり大変興味深い。

次に町屋建物の構造について、南北の両壁部分を搅乱により削平されているものの1棟全域を検出した町屋建物S B201においてみる。S B201の規模は推定で、間口が5.5mと狭く、奥行が8.0mと東西に細長いもので、南側に土間、北側に床貼の部屋部分をもついわゆる「片土間式」の建物である。焼失時の熱により赤変や焦げが確認できるため生活面が特定しやすく、検出状況としては、土間部分は砂や土、粘質土などを層厚1～数cmで版築がみられ、床が敷かれていた部分には砂が敷き詰められ、東石と考えられる礎石が配されている。今回の調査で検出した他の町屋建物についても平面形式が確認できるものはすべてこの「片土間式」の建物である。

この「片土間式」の平面形式をとる町屋は、兵庫津遺跡内の町屋の構造としては、織豊期から江戸時代にかけての町屋を発掘した際に一般的にみられる町屋建物であり、隣接する第62次調査では確認された100棟を超える町屋において異なった形式を探るものはわずか数棟のみであった。さらに、兵庫津内の町屋建物の記録として江戸時代後期の古文書として残されている『座古屋久太夫居宅絵図』⁽⁴⁾にも同様の間取りがみられる。

また、第2遺構面の町屋建物には土間に付属する施設として、土間部分にカマドが設けられている。構造は、これまでの調査で確認されているものと同じで、平面形は馬蹄形で燃焼部を掘り込み、その上に粘土質の土で壁を構築したもので、2～5連が一組となり1基のカマドを構成している。今回検出したS B202やS B204をはじめ、これまでの調査での検出例からも壁際に設けられる場合が多い。しかし1軒の土間部分の何ヶ所かで検出される場合や、数次にわたる切り合いがみられることがあることから、頻繁に造り替えが行われていたようである。また、同じ兵庫津遺跡内でも七宮町における第14次調査地などでは、宝永の大火（1708年）の被災面の町屋においては、移動式のカマドがみつかっているものの、この形式のカマドは検出されておらず、この面より下層の遺構面になつてはじめてカマドの存在が確認されている。今回の第2遺構面の時期を考えると、比較的早い段階で掘込み式のカマドを採用している資料となる。

またS B201の部屋部分で今回検出されたイロリは、一辺90cmほどの規模で、周囲を粘土によって四角く区切っている。このイロリも、兵庫津遺跡の町屋ではよく見られる遺構である。第62次調査では、粘土に竹などで芯を入れたものや、瓦片などで底部を開くものなど入念な造りのイロリも確認されている。なおイロリについても、カマドと同様に造り替えがよくみられる。位置は、部屋部分の中央に設けられることや、S B201のように土間との境に配される場合が多い。

今回検出したS B201では、北側の外壁と思われる土壁が建物内に倒れこんだ状態で検出された。土壁は芯材に太さ1cm前後の竹状の材を木舞として組む様子が観察された。壁の構造を知る良好な資料といえよう。焼失後の炭化材の散在する町屋に焼け残った壁が倒れ込んだ状態で、そのまま整地するという造成過程がわかった。

なお検出した町屋建物のうち、S B305の土間については、版築土の中にタニシやシジミの貝層を確認している。土壤改良のために混入させた可能性も考えられるが、今後の類例の増加を待ちたい。

その他、町屋に伴う生活関連遺構を、各遺構面において確認している。特徴的な遺構として、埋桶遺構・石（木）組遺構などがある。これらの遺構が町屋建物の裏にあたる空間に設けられる遺構である。

埋桶遺構は、径60cm～90cmの木桶を掘形に埋め込んだ遺構で、第1・2遺構面において検出した。この遺構は、兵庫津内の他の調査でも町屋に伴い多くみつかっている。用途としては、内部に溜まった土壤に魚の骨や鱗、貝殻などが含まれるためゴミ穴と考えられる遺構である。

石組遺構についても、兵庫津内で多くみつかる遺構で、一般的に形状は、方形で4面の側壁に石積みをおこなう一方、底部については、素掘りのままである。今回の調査でも第1～5遺構面において検査している。石組遺構については、類似する遺構が、大坂城下町跡をはじめ各地の近世遺跡で確認されており、用途については、水溜めや貯蔵庫、便槽などがあげられている。⁽¹⁾

第14次調査の報告書において、本遺跡に存在する石組遺構については、検出状況から貯蔵庫として使用された可能性が高いと指摘したが、それ以降、今回の調査も含めて他の用途を示す材料は確認できなかった。また木組遺構については、石組遺構のバリエーションのひとつとして捉えられる遺構である。最後に、第3遺構面については、第2遺構面のすぐ下で町屋に伴う遺構が検出されているものの、第4遺構面で確認した町屋遺構については、層厚40～70cmにおよぶ造成土の構築が認められ、第5遺構面についても同様の造成土がみられた。すぐ北に隣接する第62次調査地の閑屋町地区の西部においては上面の削平によって不明であった町づくりの過程を示す成果と考えられる。

第2節 遺物について

前節で触れているように、今回の調査地は新在家町という地区に位置しており、北側に位置する第62次調査地の閑屋町地区から続く町屋遺構を検査した。両調査で確認したそれぞれの町屋建物は、火災に遭う度に一定の範囲ごとに盛土を伴って順次建て替えられており、存続時間は一定ではない。また両調査の出土遺物の量については圧倒的な差がある。

本節では、以上の状況を踏まえた上で、両調査の町屋遺構出土の土器・陶磁器を取りあげ、近接した町屋の出土遺物について組成を中心に類似点や相違点を探り、考察を加えたい。⁽⁶⁾

第62次調査で確認された遺構については報告書において時期設定が行われており、I期（江戸時代後期以降）、II期（江戸時代前傾～中期）、III期（織豊期後半～江戸時代初期）、IV期（織豊期前期）およびV期（同）となる。今回の調査で検出した遺構面との対応については、第1遺構面がI期、第2・3遺構面がII期、第4・5遺構面がIII期の後半に概ね対応すると考えられるが、III期の前半以前の時期に相当する遺構は確認していない。

土師器皿については、第62次調査町屋遺構出土のものでは、非ロクロ（手づくね）成形のものが多く、底部糸切りのものが少ない傾向がIII期を中心として指摘されているが、当調査ではロクロ成形で底部回転糸切りのものが多く、手づくね成形のものは少ない。また土師器炮烙は、第62次調査では、器高が高く外面に叩き痕が残る難波分類A類が多く、器高の低い同D類は少ない傾向があるが、当調査出土の炮烙は、同D類がやや多く、同A類は少ない。

陶器では、両調査とも、唐津窯製品が多い傾向がある。見込み蛇の目釉剥ぎ碗や刷毛唐津、二彩手や三島手がみられる。胎土目、砂目については、数量的な統計は行っていないが、両調査とも、ともにみられる。当調査では、古い様相を示すものは376の皮鯨手襲皿のように下層で出土しているが少なく、大半は砂目出現以降のものである。二彩手は皿や鉢、香炉がみられる。三島手には鉢や壺がある。絵唐津は、当調査では極少量である。

また銅綵釉を施し、見込み蛇の目釉剥ぎの嬉野窯皿も両調査ともに出土しているが、当調査の方が割合が高い傾向にあり、S X127のようにまとまって出土し、さらに通常みられる皿以外に口縁が輪花状を呈する皿が含まれるなどの特徴が見出せる。

織部や、黄瀬戸などは、第62次調査では一定量含まれるが、当調査では出土していない。

なお、陶器擂鉢には、唐津窯、須佐窯、備前窯、丹波窯、堺・明石窯系、瀬戸美濃窯といった各生産地のものが含まれ、大まかには両調査ともに共通する。このうち堺・明石系のものについては当調査ではS X208から18世紀代のものが1点出土しているのみである。唐津窯のものは当調査では18世紀前半のものであるが、第62次調査では17世紀代のものである。須佐窯のものでは両調査とも17世紀中頃～後半のものや、17世紀末ないし18世紀前半頃のものがある。備前窯のものは、当調査では16世紀第3四半期のものから18世紀前半のものがある。第62次調査では17世紀代までのものに限られる。丹波窯のものは、両調査とともに17世紀第1四半期以降のものがある。第62次調査ではヘラ描きの擂目があるが、当調査ではみられない。瀬戸美濃窯のものは、両調査ともに少ないが、当調査では全体の器形がわかる309がある。

磁器については、国産のものとしては波佐見窯染付、同白磁、同青磁、同青磁染付、初期伊万里、瀬戸美濃窯染付がある。瀬戸美濃窯のものは極少量である。また、初期伊万里の製品は、第62次調査では一定量出土しているが、当調査では少ない。

輸入陶器では、両調査とも、中国製磁器である景德鎮窯青花や漳州窯青花、朝鮮王朝陶磁や東南アジア産陶器などが出土している。

当調査では、景德鎮窯や漳州窯の製品はともに約40点出土している。大半が青花で、景德鎮窯のものには白磁が、漳州窯のものには白磁や五彩が、それぞれ数点含まれる。ほかに明確な産地決定には至っていないが中国製のものと考えられる青花や白磁があわせて約10点出土している。

景德鎮窯のものには第62次調査では、器形の明らかなものが一定量出土しているが、当調査ではいずれも破片資料である。一方漳州窯のものでは、完形品ではないが275のように優品も含まれている。当調査ではこれらの景德鎮窯や漳州窯の製品はいずれも16世紀末～17世紀初頭を中心とする時期のもので、各遺構面から出土している。江戸時代後半期までの時期において同様な年代を示す（古い時期の）当該製品が出土していることの意味を求めるならば、町屋建物の建て替えなどの際の整地に伴って下層に含まれる遺物が攪拌されて上位の土層に混入したことや、あるいは伝世品として扱われたものが新しい時期になって破片となつたものについては断定材料がなく、今後の課題である。

なお、兵庫津遺跡においては、景德鎮窯や漳州窯の製品は、第53次調査では16世紀末～17世紀初頭の第6遺構面のS K602において唐津窯皿（胎土目・砂目）、絵柄津皿と共に伴っている。また、第14次調査でも16世紀後半～末頃の第5～6遺構面で多く確認されている。

朝鮮王朝陶磁については、第62次調査では器形がわかるほど遺存状態がよいものが認められるが、当調査では小片が約10点出土しているのみである。東南アジア産陶器については、第62次調査では一定量確認されているが、当調査では、S K108からベトナム産長胴壺の小片が1点出土しているのみである。

中国製の青磁では、S B305裏ベース層から9～10Cの越州窯碗が1点出土している。また龍泉窯の製品が可能性のあるものを含めて7点出土しており、両調査とも古手のものも若干出土しているが主体は15世紀代のものである。

以上、種別ごとに両調査出土の土器・陶磁器についてみてきたが、両調査における出土遺物の様相の違いについては、第62次調査出土遺物の方が時期的に古いものを多く含むことにその要因があるように考えられる。新在家町という地区がその名の示すように兵庫津の中で比較的新しい時期に開発された町であることから、閑屋町地区に比べて古い時期の遺構が乏しいことに由来するのかもしれない。また全般的な内容としては、第62次調査出土の陶磁器には、茶器関係のものが多く含まれるが、今回の調査では少ないということがあげられよう。

第3節 結びにかえて

今回の調査地は、兵庫津遺跡の中でも南側の地区に位置しており、これまであまり調査の行われてこなかった地区にあたっている。さらに、新在家町という兵庫津の町の中でも比較的新しい時期に開発が行われた地区において発掘調査を実施した。

調査の結果、すでに述べてきたように、火災による焼失を受けて順次建て替えられた町屋建物群や、次々に掘り返されたごみ穴などの土坑、石組造構、井戸などの遺構を検出し、面によつては大規模な造成が行われたことも確認した。

一方、今回の調査では中世に遡る時期の遺構については確認できず、また遺物についても確実に中世まで遡ると考えられるのは軒平瓦や中国製陶磁器の一部のみであった。このことについては、第62次調査においても中世の遺構が確認されたのが西側に偏っていたこと、さらに今回の調査地の西側に位置する地区で実施した第59次調査においても中世の遺構・遺物が確認されていることから、当調査地よりも西側の地区において中世の遺構が広がるものと考えられる。

また遺物の中には、第3章第8節で触れられているように遺構埋土や造成土中から動物遺存体が出土している。魚類や貝類の積極的な利用が窺われ、当時の生活の一端を表している。SB305では土間に貝殻が埋め込まれていた。タニシなどの食用の多種の貝を使用しているが、当遺跡では他に例をみないほど多量に使用している。さらに第4遺構面造成層中からはクジラ類の骨が出土している。捕鯨によるものは即断できないが稀有な例であり、今後も検討を加えていきたい。

以上、これまで不明なことが多かった兵庫津遺跡の南部にあたる地区において、江戸時代における土地開発および土地利用の状況が明らかとなつた意義は大きいといえる。

なお今回、発掘調査中および調査終了後の整理作業中に、多くの専門家の方々からご指導、ご助言をいただくことができた。それらのすべてを報告書に反映させることはできなかつたものの、より広い見地から遺構や遺物などの発掘調査成果について検討することができた。

最後に、文末ではありますが、本調査および報告書の刊行に至るまでの業務に携わった関係者および御協力をいただいた方々、機間に對し心からの感謝とお礼を述べ、本書の結びに変えたいと思います。

註

- (1) 神戸市立博物館寄託品
- (2) 神戸市立博物館寄託品
- (3) 斎木巖・中谷正・内藤俊哉編『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2017
- (4) 神戸市立博物館寄託品（神戸市立博物館（編）『よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる－』2004）
- (5) 内藤俊哉「第2章第12節まとめ」『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』神戸市教育委員会2010
- (6) 本書における土器・陶磁器等の考察に関しては卷末に掲げた各文献を参考としたが、特に形態分類を引用したものについては以下の文献に掲っている。

土師器燃焼：難波洋三『徳川氏大坂城期の燃焼』『難波宮址の研究 第九』財大阪市文化財協会1992

燒塙：小川望『燒塙と近世の考古学』同成社2008

丹波窯：長谷川廣『近世丹波窯の成立に関する考察』『兵庫陶芸美術館研究紀要』兵庫陶芸美術館2009

須佐窯：佐伯昌俊『近世須佐窯に関する一考察』『山口考古』第30号山口考古学会2010

参考文献

〔兵庫津遺跡全般〕

阿部功編『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2008

岡田章一・菱田淳子・深江英恵編『兵庫津遺跡II』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004

黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』神戸市立博物館2010

神戸市立博物館(編)『よみがえる兵庫津―灘湊都市の命脈をたどるー』神戸市立博物館2004

斎木巖・中谷正・内藤俊哉編『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2017

藤本史子・中井淳史編『兵庫津の絶続的研究』大手前大学史学研究所2008

松井良祐編『江戸時代の兵庫津』兵庫県立考古博物館2016

安田滋・内藤俊哉・中谷正『大輪田』“兵庫”そして“神戸”』神戸市教育委員会2017

〔町屋〕

高久智弘「近世期兵庫津北派における浜先地開発と屋敷割の変化について」『神戸市立博物館研究紀要』第18号神戸市立博物館2002

高久智弘「近世兵庫津繪図について」『中近世における都市空間の景観復元に関する学際的アプローチ』平成15~18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書(研究代表者 藤田裕嗣)2007

高橋康夫『京町家・千年のあゆみ』学芸出版社2001

中谷保二『濱本陣の研究』1956

野口徹『中世京都の町家』東京大学出版会1988

〔穴藏〕

大成可乃「町人と穴藏」『幕火』36号(財)大阪市文化財協会1992

豊田裕章「関西における石積み土壙の諸問題」『関西近世考古学研究』II 関西近世考古学研究会1992

堀内明博「穴藏に関する遺構群をめぐって」『関西近世考古学研究』III 関西近世考古学研究会1992

豆谷浩之「近世大阪における穴藏」『大阪歴史博物館研究紀要』第8号大阪歴史博物館2010

〔土器〕

岡田章一・長谷川眞「兵庫津遺跡出土の土製烹煮具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003

難波洋三「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究 第九』関大阪市文化財協会1992

〔陶磁器〕

赤沼多佳はか『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』茶道資料館1990

赤松和佳「畿内における貿易陶磁の様相」『中近世陶磁器の考古学』第三巻雄山閣2016

赤松和佳「伊丹郷町遺跡出土の貿易陶磁器」『関西近世考古学研究』24 関西近世考古学研究会2016

大橋康二「いつわる京焼風陶器の年代と出土分布について」『青山考古』第8号青山考古学会1990

大橋康二『古伊万里の文様』理工学社1994

大橋康二『世界をリードした磁器窯・肥前窯』新泉社2004

大橋康二『中国染付磁器の始まりから発展と、有田磁器との関わり』『日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館2016

大橋康二監修『土の美 古唐津』佐賀県立九州陶磁文化館2008

大橋康二・吉永陽三・百田美和編『古伊万里の見方 シリーズ1』佐賀県立九州陶磁文化館2004

大橋康二・鈴田由紀夫・百田美和編『古伊万里の見方 シリーズ2』佐賀県立九州陶磁文化館2005

大橋康二・吉永陽三・宇治章・藤本志穂子・山本文子編『古伊万里の見方 シリーズ3』佐賀県立九州陶磁文化館2006

大橋康二・鈴田由紀夫・宇治章・中村康子・山本文子編『古伊万里の見方 シリーズ4』佐賀県立九州陶磁文化館2007

宇治章・藤原友子・大橋康二編『古伊万里の見方 シリーズ5』佐賀県立九州陶磁文化館2008

小川望『焼塩窯と近世の考古学』同成社2008

九州近世陶磁学会事務局編『九州陶磁の編年』2000

佐伯昌俊「近世須佐焼に関する一考察」『山口考古』第30号山口考古学会2010

鈴木裕子「江戸出土の貿易陶磁」『関西近世考古学研究』24 関西近世考古学研究会2016

角谷江津子「肥前京焼風陶器と京焼」『関西近世考古学研究』III 関西近世考古学研究会1992

弦本美菜子「日本における津州窯系陶磁器の流通・消費」『中近世陶磁器の考古学』第三巻雄山閣2016

富永樹之「輸入中国青花の高級食器としての受容の過程」『日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館2016

- 中野雄二編『くらわんか藤田コレクション』長崎県波佐見町教育委員会2013
- 西田宏子・大橋康二監修『別冊太陽「古伊万里」』平凡社1988
- 長谷川眞「近世丹波焼の成立に関する覚書』『兵庫陶芸美術館研究紀要』兵庫陶芸美術館2010
- 長谷部楽爾・今井敦『日本出土の中国陶磁』平凡社1995
- 藤澤良祐・岡本直久「江戸時代の瀬戸窯業」『江戸時代の瀬戸窯』財瀬戸市埋蔵文化財センター2002
- 藤沢良祐「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの』財瀬戸市文化振興財团埋蔵文化財センター2006
- 松本百合子「大阪市出土の近世貿易陶磁器」『関西近世考古学研究』24関西近世考古学研究会2016
- 宮本康治「大阪出土の東南アジア陶磁器をめぐって」『中近世陶磁器の考古学』第三巻雄山閣2016
- 森村健一「15~17世紀における東南アジア陶磁器からみた陶磁の日本文化史」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集
　　国立歴史民俗博物館2002
- 森村健一「福建省漳州窯の研究」『陶磁器の考古学』第七巻雄山閣2017
- 山本文子「肥前芙蓉手皿の展開」『日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館2016
- 山本文子編『日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館2016
- 〔瓦〕
- 市川創「徳川期大阪城の瓦」『大阪文化財研究所研究紀要』第16号（公財）大阪市博物館協会 大阪文化財研究所2015
- 市川創「大阪における近世瓦の生産と流通」『幕藩体制下の瓦』第66回埋蔵文化財研究集会事務局2017
- 木村友記「浜津出土の中世瓦編年」『帝塚山大学院人文科学研究科紀要』第13号帝塚山大学大学院2011
- 黒田慶一「瓦塙類」『瓦屋町遺跡発掘調査報告』財大阪市文化財協会2009
- 小林謙一・佐川正敏「平安時代~近世の軒丸瓦」『伊河留我 法隆寺昭和資料帳調査概報』法隆寺昭和資料帳編纂所1989
- 櫻田小百合「徳川期大阪城瓦の編年試案」『大阪文化財研究所研究紀要』第18号（公財）大阪市博物館協会 大阪文化財研究所2017
- 杉本宏「桟瓦考」『考古学研究』第46巻第4号考古学研究会2000
- 杉本宏「桟瓦考拾遺」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会2002
- 杉本宏「桟瓦の成立と格」『幕藩体制下の瓦』第66回埋蔵文化財研究集会事務局2017
- 大安寺『重要文化財大安寺本堂修理工事報告書』1999
- 坪之内 徹ほか『谷川瓦調査報告書I』岬町教育委員会・谷川瓦調査委員会1992
- 兵庫県明石郡役所「明石市治内容一覧」1915『明石市史資料（明治後期）第八集（上）』明石市教育委員会1990所収
- 平井俊行「西村家の『由緒覺書』の考察と全文紹介』『京都府埋蔵文化財論集』第3集財京都府埋蔵文化財調査研究センター1996
- 毛利光彦後、佐川正敏・花谷清『法隆寺の至宝 第15巻 瓦~昭和資料帳』㈱小学館1992
- 山崎信二「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究所2000
- 山崎信二「近世瓦の研究」奈良文化財研究所2008
- 吉田理編『重要文化財 福萬寺松鶴堂庫裏及び裏門・東方丈修理工事報告書』京都市教育庁2013
- 〔煉瓦〕
- 北山峰生「煉瓦についての概説」『ヒストリア』第231号大阪歴史学会2012
- 黒田恭正編『御影郷古酒蔵群第4次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2007
- 竹村忠洋「阪神地域で使用された煉瓦」『ヒストリア』第231号大阪歴史学会2012
- 千種浩編『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会2011
- 丸山潔編『神戸臨港線南本町架道橋範囲確認調査報告書』神戸市教育委員会2008

表6 出土遺物観察表

※時期は世紀を略してCと表記し、時期の明確なものについては1世紀内を4分割して表示している（例：17C2/4=17世紀第2四半期）。

発掘 場所 番号	遺物 番号	文書番 号	種出 頭	区名	出土遺構名	器種等	（ ）内の数値は推定値、〔 〕内の数値は現存値を示す。				
							口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	備考	時期
60	1	1	952	1 東部	S E 102石造み内	土器器皿（灯明皿）	6.35	1.1	3.05	回転糸切り	
	2	2	994	1 東部	S E 102棚形	土器器皿	(7.65)	1.85	5.95	回転糸切り	
	3	1	952	1 東部	S E 102石造み内	京焼碗	12.7	5.6	3.8		18C前半
	4	2	995	1 東部	S E 102棚形および その周囲	肥料系陶器碗	(9.3)	7.0	4.5		18C
	5	3	995	1 東部	S E 102棚形および その周囲	透野京焼碗袖瓶	(10.6)	6.7	(4.4)		18C前半
	6	4	952・975	1 東部	S E 102石造み内・ 整地網（下）	透野京焼緑釉小瓶	12.5	2.8	7.3	内面：印刷	18C前半
	7	5	1015	1 東部	S E 102棚形	丹波焼火入れ	(12.4)	6.7	(10.0)	口縁：キセラ印刷	18C
	8	3	1082	1 東部	S E 102棚形	土器器皿（灯明皿）	(7.7)	1.2	(6.8)	回転糸切り	
	9	7	1127	1 東部	S E 103・瓦建戸2削除中	透野見窓白磁小坪	6.4	4.3	2.7		18C前半
	10	6	1127	1 東部	S E 103・瓦建戸2削除中	透野見窓染付陶瓶	(10.2)	6.2	(4.0)	草花文	18C前半
	11	4	902	1 東部	S X 101	土器器皿	7.4	1.3	6.4	回転糸切り	
	12	20	261・307・ 995・394	1 東部	S X 101	土器器皿	28.8	6.4	-	難波D型	18C
	13	12	967	1 東部	S K 103	江永窯陶染付筒系器	(8.2)	6.8	4.4		18C前半
61	14	11	963・967 235	1 東部	S K 103	透野見窓染付縦口	7.7	5.9	4.8	花文、そば葉口	18C前半
	15	13	967・258	1 東部	S K 103・整地網	透野見窓染付花生	(1.3)	12.4	4.5	宝づくし文	18C前半
	16	18	292・320・ 135・179	1 東部	S K 121・同 土器側面 S K 121・土器側面	透野見窓青磁染付縦口	11.1	6.5	4.4		18C平ば～ 後半
	17	17	320・363・ 1378	1 東部	S K 121・同 土器側面	土器器皿	(12.9)	25.9	12.0		
	18	22	426	1 中央部	S X 131断面	土器器皿	(7.9)	1.4	6.1	回転糸切り	
	19	35	641・415・ 205	1 中央部	S X 131・同 断面・ 透野S型	土器器皿	22.3	6.3	-	難波B型？	
	20	21	117	1 中央部	S X 103	透野見窓染付六角瓶	15.4	7.6	7.4		19C
	21	22	229	1 中央部	S X 105断面	丹波焼火入れ	(13.0)	6.4	(9.9)		18C
	22	19	347	1 中央部	S P 101	土器器皿	-	(14.5)	9.9	貼衣文	
	23	23	139	1 中央部	S X 113	陶小瓶	8.9	4.7	3.0		18C前半
	24	24	139	1 中央部	S X 113	陶小瓶	8.9	4.8	3.2		18C前半
	25	25	139	1 中央部	S X 113	透野見窓染付陶瓶	(9.3)	5.7	(3.8)	花文、焼継ぎ	18C後半
62	26	26	139	1 中央部	S X 113	透野美濃窯染付陶瓶	(8.0)	4.5	(3.0)		19C
	27	27	139	1 中央部	S X 113	透野D明磁器蓋置	8.8	2.0	4.8		18C
	28	28	139	1 中央部	S X 113	透野不明陶器容器	8.0	3.0	-		
	29	29	139	1 中央部	S X 113	透野不明陶器容器	8.0	2.0	6.8		
	30	30	139	1 中央部	S X 113	風呂不明磁器水滴	-	4.1	4.0	宝づくし文	
	31	31	139	1 中央部	S X 113	風呂不明磁器水滴	6.6・10.8	3.4	-		
	32	32	139	1 中央部	S X 113	簡易水溜？	長5.8・9 高さ5.7	幅6.6	-		18C
	33	33	139	1 中央部	S X 113	土製品・文箱（漁事道具）	長さ5.5 幅3.8	厚さ0.7	-		
	34	34	139	1 中央部	S X 113	土製品・小形碗（漁事道具）	長さ5.8 幅3.4	厚さ0.9	使用痕		
	35	16	239・273	1 西部	S K 115	土器火舟	27.8・28.0	10.0	-		
	36	14	162・573	1 西部	S K 110	土器器皿	(29.2)	7.0	-	難波D型、把手付き	
	37	15	1052	1 西部	S K 110仲内	長持直室青花瓶	-	(2.9)	5.5	水滴文	16C末
	38	37	076	1 東部	第1構造面～第2道 構造面地層	透野不明磁器水滴？	-	(4.1)	-		
63	39	9	400	1 中央部	波足（近代戸井）	波足波足	(10.2)	5.6	(4.0)		18C前半
	40	10	400	1 中央部	波足（近代戸井）	唐津窑青瓷	(10.2)	6.9	5.0	刷毛目文、蓋青色	18C前半
	41	8	400	1 中央部	波足（近代戸井）	唐津波足	(31.6)	9.5	13.2	刷毛目文	18C前半
	42	91	1165	2 東部	S B 209・ロリ？断面中	透野美濃窯綠色袖环	8.1	4.3	3.5		17C1/4
	43	93	559	2 東部	S X 203	透野見窓染付陶瓶	(10.2)	5.9	3.9	草花文	18C前半
	44	94	899	2 東部	S X 203・石除去中	透野見窓染付陶瓶	(9.3)	5.6	3.6	草花文	18C前半
	45	95	899	2 東部	S X 203・石除去中	透野美濃窯綠色袖环？洗し茎置	(12.8)	2.6	(8.0)		18C前半
	46	54	544	2 東部	S X 204	土器器皿	(7.0)	1.7	5.7	回転糸切り	
	47	55	990	2 東部	S X 204・石除去中	土器器皿（灯明皿）	(10.0)	1.7	(8.3)		
	48	23	199	2 中央部	S B 201・上蓋型地層	土器器皿（灯明皿）	(8.7)	1.7	(7.0)	回転糸切り	
	49	24	206・811	2 中央部	S B 201・上蓋型地層・同層	土器器皿	(9.7)	1.65	(8.4)	回転糸切り	
64	50	25	256	2 中央部	S B 201・上蓋型地層	土器器皿（灯明皿）	10.0	2.05	7.9	回転糸切り（厚桂 千利明）	
	51	56	216・237	2 中央部	S B 201・上蓋型地層	京焼風上蓋	11.2	6.5	4.4		18C
	52	57	216	2 中央部	S B 201・上蓋型地層	京焼風	(11.1)	6.3	4.2	櫻山山水文、口紅	
	53	58	237	2 中央部	S B 201・上蓋型地層	透野不明陶器皿	(14.5)	2.9	8.6	景德龍模做	
	54	59	206	2 中央部	S B 201・上蓋型地層	透野京焼袖瓶	-	(2.7)	4.8	砂目	17C後半
	55	60	245	2 中央部	S B 201・上蓋型地層	透野京焼袖瓶	12.7	3.7	4.8		18C前半
	56	69	526	2 中央部	S B 201・裏面上蓋型地層	透野京焼袖瓶	(12.7)	3.4	4.6		18C前半
	57	68	526・552	2 中央部	S B 201・裏面上蓋型地層	透野見窓染付陶瓶	(14.3)	3.6	4.8	花文	18C前半
	58	70	526	2 中央部	S B 201・裏面上蓋型地層	透野見窓染付陶瓶	(8.0)	6.4	3.9	界藤文	18C前半
	59	63	327・341・ 663・845	2 中央部	S B 201・上蓋型地層・S B 202 （上後土・S B 204・カツア）、 第2進門べース層	透野見窓染付陶瓶	(10.5)	6.1	(4.0)	寿字文	17C後半

美術品 番号	実物 番号	表番号	樹種等	出土地名	器種等	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	備考	時期
62	61	209 + 845	2 中央部	S B201上面整地層・ 第3遺物群出土	埴地不明陶器類	-	[12.9]	17.4		
63	61	312 + 467	2 中央部	S B201上面整地層・ 埴地上面出土	波佐見窯淡付小坏	6.4	4.0	2.5	界線文	18C前半
62	62	H3・159・ 190・212・ 237・563・ 536・563・ 534・185・ 1269	2 中央部	S B201上面整地層・ 埴地上面出土・S B201上面整地層・ 埴地不明陶器類・S B201上面整地層・ 埴地不明陶器類・S B201上面整地層・ 埴地不明陶器類・S B201上面整地層・ 埴地不明陶器類	波佐見窯淡付小坏	31.2	7.5	15.6		17C後半
63	28	688	2 中央部	S B201埴地上	土師器皿 (灯明皿?)	7.6	1.4	6.3	回転糸切り	
64	29	703	2 中央部	S B201埴地上	土師器皿	(7.8)	1.65	6.62	回転糸切り	
65	27	645	2 中央部	S B201埴地上	土師器皿	7.9	1.8	6.55	回転糸切り	
66	65	687	2 中央部	S B201埴地上直上	肥前白釉陶碗	11.6	6.9	4.8		18C前半
67	71	527	2 中央部	S B201埴地上直上	波佐見窯淡付丸壺	(10.4)	5.9	4.4	松葉文	18C前半
68	72	527	2 中央部	S B201埴地上直上	波佐見窯淡付小坏	(6.4)	4.0	3.0	波文	18C前半
69	30	759	2 中央部	S B201埴地上	土師器皿	6.45	1.3	6.15	回転糸切り	
70	67	268 + 552・ 759	2 中央部	S B201埴地上面接 山中・同裏・整地層・ 床面	波佐見窯淡付美手皿	(21.6)	3.7	(10.6)		17C後半
71	78	552 + 759・ 811	2 中央部	S B201埴地上・同裏・ 同・整地層	佐佐窯縄錆	(31.5)	[8.2]	-	繩目8本、 佐10本群B類	
72	56	496	2 中央部	(S B201 引手?)	土師器皿 (灯明皿)	7.3	1.7	5.7	回転糸切り	
64	73	5 963	2 中央部	S X27上層	土師器皿	6.6	1.6	5.9	回転糸切り	
74	14	697	2 中央部	S X27最下層	土師器皿	6.9	1.5	5.0	回転糸切り	
75	9	433	2 中央部	S X27上層	土師器皿 (灯明皿)	7.0	1.5	5.6	回転糸切り	
76	17	706	2 中央部	S X27最下層	土師器皿 (灯明皿)	7.1	1.45	5.95	回転糸切り	
77	18	856	2 半免部	S X27最下層	土師器皿 (灯明皿)	7.1	1.5	5.65	回転糸切り	
78	12	493	2 中央部	S X27下層	土師器皿 (灯明皿)	7.2	1.35	5.85	回転糸切り	
79	6	428	2 中央部	S X27上層	土師器皿	7.4	1.6	6.2	回転糸切り	
80	10	463	2 中央部	S X27上層	土師器皿 (灯明皿)	7.4	1.5	6.8	回転糸切り	
81	8	432	2 中央部	S X27下層	土師器皿 (灯明皿)	7.5	1.45	6.8	回転糸切り	
82	7	428	2 中央部	S X27上層	土師器皿	7.6	1.35	7.1	回転糸切り	
83	19	694	2 中央部	S X27最下層	土師器皿 (灯明皿)	8.3	1.65	5.4	回転糸切り	
84	21	982	2 中央部	S X27形骸	土師器皿	8.05	1.75	5.75	回転糸切り	
85	16	695	2 中央部	S X27最下層	土師器皿 (灯明皿)	7.7	1.7	5.55	回転糸切り後・波打こじ	
86	13	492	2 中央部	S X27下層	土師器皿 (灯明皿)	9.5	2.1	7.55	回転糸切り後・波打こじ	
87	20	513	2 中央部	S X27最下層	土師器皿	10.05	2.1	6.1	回転糸切り後・波打こじ	
88	11	963	2 中央部	S X27上層	土師器皿 (灯明皿)	(10.2)	1.65	6.6		
89	38	981 + 982	2 中央部	S X27	土師器皿 (燈明)	(25.6)	7.6	-	繩目C類?	
90	53	887 + 281・ 700	2 中央部	S X27下層・S B 208號上	瓦質土器火鉢	30.0×	[10.7]	11.6	-	
91	43	445	2 中央部	S X27上層	肥前白釉陶碗	(9.6)	7.3	4.9		
92	45	513	2 中央部	S X27最下層	肥前白釉陶碗	10.0	6.0	5.0	高台内: 鋸	18C前半
93	44	431 + 444・ 463 + 513	2 中央部	S X27上層・同 下層・同・土埋窯別 同・下層・土埋窯別	堀野窑淡釉盤	12.6	3.6	4.6		18C前半
94	46	697	2 中央部	S X27最下層	南津屋淡釉丸壺	13.3	3.9	4.5	界線文、砂目	17C 2/4
95	41	328 + 435・ 443	2 中央部	S X27上層	堀野窑淡釉反復	13.4	4.1	4.9		17C 2/4
96	42	427 + 436	2 中央部	S X27上層	堀野窑淡釉反復	13.6	3.9	4.9		17C 2/4
97	39	259 + 443	2 中央部	S X27上層・S B 201號整地層	堀野窑淡釉反復	19.8	5.9	5.8		18C前半
98	40	440	2 中央部	S X27上層	堀野窑淡釉梭花瓶	20.7	6.7	6.5		
65	99	49 696	2 中央部	S X27最下層	肥前陶器	(10.8)	6.3	4.2	草花文	18C前半
100	50	513 + 267・ 856	2 中央部	S X27最下層	肥前陶器	9.8	6.4	5.0	宝づくし文	18C前半
101	51	513 + 696	2 中央部	S X27最下層	肥前陶小坏	7.6	5.4	3.6		18C前半
102	52	1325	2 中央部	S X27上層・整地層	肥前陶小坏	(7.2)	4.7	3.1		
103	47	696 + 699	2 中央部	S X27最下層	波佐見窯淡付丸壺	12.8	3.9	4.9	鳳凰文?	18C前半
104	48	513	2 中央部	S X27最下層	波佐見窯淡付丸壺	9.7	3.2	-	ハッコ文	18C前半
105	100	564	2 中央部	S X209	肥前白釉陶碗	(11.3)	7.0	4.8		18C前半
106	101	849	2 中央部	S X209	初期伊万里淡付丸壺	(12.3)	3.0	(4.4)	草花文	17C 2/4
107	31	551	2 中央部	S B202埴地上	土師器皿 (灯明皿)	7.5	1.4	6.95	回転糸切り	
108	32	786	2 中央部	S B202カヨカマツリ	土師器皿 (灯明皿)	8.5	1.75	7.0	糸切り	
109	76	363	2 中央部	S B202上面整地層	唐津窑淡釉色緑瓶	(12.8)	3.2	5.4	砂目	17C 2/4
110	78	341	2 中央部	S B202上面埴地上	初期伊万里淡付丸壺	-	(1.2)	4.2	花文	17C 2/4
111	77	159 + 359・ 908	2 中央部	S B202上面埴地上	S B202ヨリカマツリ	19.0	10.8	9.0		17C 2/4
112	79	770 + 909	2 中央部	S B202北側	波佐見窯	(24.9)	11.1	11.4	繩目日本 長崎伝印記 (タシ) 緯	17C 2/4
113	38	999	2 中央部	S B204ヨリ東側	土師器皿	7.5	1.45	6.6	回転糸切り	
114	36	967	2 中央部	S B204ガマド村近	土師器皿	(7.8)	1.6	6.0	回転糸切り	
116	37	996	2 中央部	S B204ヨリ東側	土師器皿	7.85	1.55	6.9	回転糸切り	

高麗 朝鮮 年号 番号	造物 者番号	元朝 番号	其番号	標出 面	区名	出土遺構名	器種等	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考	時期
65	117	34	672	2	中央部	S B204土壇面	土師器皿	(7.9)	1.6	(6.1)	二次焼成、素切り	
	118	33	556	2	中央部	S B204カマド②	土師器皿(灯明皿?)	7.95	1.6	6.55	回転素切り	
	119	80	354	2	中央部	S B204上層土壇	土師器皿	最高点直径7.9	3.2	(4.1)	つまみ棒1.0cm	17C 初
	120	52	497	2	中央部	S X201	土師器皿	7.75	1.9	6.7	回転素切り	
	121	53	497	2	中央部	S X201	土師器皿	7.95	1.45	6.7	回転素切り	
	122	57	562	2	中央部	S X208検出中	土師器皿	6.7	1.3	3.2	回転素切り	
	123	58	588・599	2	中央部	S X208	土師器皿	(7.6)	1.55	(5.7)	回転素切り	
	124	97	562	2	中央部	S X208検出中	唐津灰陶軸組	(11.8)	3.0	(5.0)	砂目	17C 2/4
	125	98	599	2	中央部	S X208	丹波灰火入れ	(16.6)	6.3	(12.0)		
	126	99	944	2	中央部	S X208形態	初期伊万里染付磁花瓶	(14.0)	2.9	(5.2)	模花文、口紅	17C 2/4
	127	96	564	2	中央部	S X207検出中	地吹不明器水槽?	5.0×3.6	1.9	-		
	128	107	385	2	中央部	S X124内層 附着物	土器器物	22.6	(5.5)	-	難波巨類?	
	129	54	465	2	中央部	S X127の東側	唐津灰陶	(9.0)	6.7	4.8		
	130	55	464	2	中央部	S X127の東側	波佐見窯染付碗	10.7	6.4	4.3	模花文	
	131	108	385	2	中央部	S X124内層 附着物	波佐見窯染付盤	(13.1)	3.2	8.0	五瓣花文、ハリ支え	18C 前半
66	132	39	170	2	西部	S B205上層地層	土師器皿	7.2	1.6	6.3	回転素切り	
	133	84	643・691	2	西部	S B205上層・S B 下層内部	備前窯施利	-	(4.2)	5.7		
	134	81	604・643	2	西部	S B205上層 S B205上層	波佐見窯染付碗	8.8	6.7	3.7	一重網目文	17C 後半
	135	85	571・643・ 691・1379	2	西部	S B205上層・同 下層・S B205上層内 部・S B205上層	初期伊万里染付灰陶組	(13.2)	3.6	5.0		17C 2/4
	136	48	640	2	西部	S B206上層	土師器皿(灯明皿)	7.15	1.65	5.9	回転素切り	
	137	60	609	2	西部	S X210	土師器皿(灯明皿)	6.6	1.65	4.9	回転素切り	
	138	61	609	2	西部	S X210	土師器皿(灯明皿)	6.6	4.9	1.7	回転素切り	
	139	102	609	2	西部	S X210	土師器皿(灯明皿)	9.7	2.0	-	底部穿孔あり	
	140	103	609	2	西部	S X210	土師器皿(灯明皿)	9.1	2.8	-	柿輪、回転素切り	18C 前半
	141	104	609	2	西部	S X210	燒付宗家紋袖鉢	(12.2)	4.0	4.5	二次焼成?	18C 前半
	142	105	609	2	西部	S X210	波佐見窯染付碗	11.2	5.7	4.3	模花文	18C 前半
	143	106	609	2	西部	S X210	波佐見窯染付碗	10.0	5.5	4.5	八ツ種梅文花	18C 前半
	144	119	615	東部	整地層	土師器皿	-	(6.9)	5.5	体部外表面「泉伊 羅」、身・小川・蟹? 附記: 小川・蟹		
	145	124	975	東部	整地層(下)	唐津美濃窑	(7.7)	5.9	3.5			
	146	125	973	東部	整地層(下)	唐津美濃窑	(6.8)	4.9	3.0			
	147	131	1042	東部	整地層(下)	唐津灰陶	唐津灰陶	7.0	3.7	5.0		
	148	132	1119	東部	整地層(下)	唐津灰陶	(12.7)	4.1	4.0	砂目、高台内: 植物 (文字不明)		
	149	118	674・906	東部	整地層	唐津灰大皿	(20.5)	6.6	6.4	刷毛目文		
	150	115	690	東部	整地層	備前窯?	火入れ?	11.0	5.9	11.4	底部外表面: 刻印	
	151	116	908	東部	整地層	丹波灰火入れ	(12.0)	6.7	(9.6)	把手残存		
	152	117	908	東部	整地層	丹波灰火入れ	(11.4)	5.6	9.0			
	153	122	736・893	東部	整地層・整地層(下)	唐津青三島手鉢	28.3	9.2	11.0	砂目	17C 後半	
67	154	113	717	東部	整地層	波佐見窯染付碗	10.5	6.0	4.2	模花文	18C 前半	
	155	127	1035	東部	整地層(下)	波佐見窯染付碗	(9.6)	5.4	4.3	模花文、足込付垂物		
	156	128	941	東部	整地層(下)	波佐見窯染付小碗	-	(5.4)	3.5	一重網目文		
	157	114	612	東部	整地層	波佐見窯染付小碗	(10.3)	7.4	6.1			
	158	126	974・1696	東部	整地層(下)	波佐見窯染付盤口	9.4	6.7	6.0	八ツ種梅花文、足込 五瓣花、高台内	18C 半ば	
	159	130	1029	東部	整地層(下)	初期伊万里染付盤	(14.2)	3.7	6.0	「日」字		
	160	111	737	東部	整地層	波佐見窯染付皿	12.7	3.1	8.2	手書き五瓣花	18C 前半	
	161	112	615	東部	整地層	波佐見窯染付盤	13.0	2.9	8.0			
	162	129	1035	東部	整地層(下)	波佐見窯染付小坪	-	3.1	-	後文?		
	163	120	736	東部	整地層	波佐見窯	(4.2)	1.5	(2.2)			
	164	123	677	東部	整地層(下)	波佐見窯染付伝瓶	(8.8)	6.4	4.3			
	165	110	908	東部	整地層	波佐見窯青磁香炉	7.2	5.4	5.6	開香炉。中国製模倣		
	166	109	908・1016	東部	整地層	肥前窯	(20.6)	3.0	(12.4)			
	167	121	615	東部	整地層	津州窯青花大皿	-	(2.9)	(15.8)			
	168	50	1103	東部	S B209上層ベース土	土師器皿	8.05	2.15	3.55			
	169	49	1103	東部	S B209上層ベース土	土師器皿	8.2	2.0	4.4			
	170	51	1103	東部	S B209上層ベース土	土師器皿(灯明皿)	8.6	1.95	5.05			
	171	92	1103	2	東部	S B209上層ベース土	土師器皿	5.0	8.6	4.6	体部外表面: 文様? 小川・蟹?	17C 2/4
	172	40	602	西部	S B205ベース層	土師器皿	6.5	1.25	6.2			
	173	41	566	西部	S B205ベース層	土師器皿(灯明皿)	6.2	1.4	4.8	回転素切り		
	174	45	602	西部	S B205ベース層	土師器皿	7.1	1.25	5.76	回転素切り		
	175	44	571	西部	S B205ベース層	土師器皿	7.4	1.6	6.6	回転素切り		
	176	43	571	西部	S B205ベース層	土師器皿(灯明皿)	7.6	1.3	6.5	回転素切り		
	177	42	566・567	西部	S B205ベース層	土師器皿	7.6	1.35	6.75	回転素切り		

器種 番号	造物 番号	元期	其番号	標出 面	区名	出土遺構名	器種等	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考	時期
67	178	89	571・1379	2	西郎	S B205-ベス層・S B305-上貝量・土壌剖面	灰褐色施釉陶器或茶灰色 陶器	(9.2)	6.9	5.4		18C前半
	179	90	567・691	2	西郎	S B205-ベス層・S B305-上貝量	廻戸美濃窯菊皿	(13.1)	2.9	7.6		18C前半
180	86	634・566	2	西郎	附蓋・S B205-~	丹波窯桔鉢	-	[9.1]	13.0	描目8本	18C前半	
181	87	549・575	2	西郎	蓋地層・S B205-~ 上層	備前窯? 油壺	(4.0)	[8.4]	5.2	墨書	18C	
182	88	566・567	2	西郎	S B205-ベス層	波佐見窑染付陶	-	[9.8]	(7.0)	一重綱目文	18C前半	
68	183	191	360	3	東郎	S X313・S X316切 合口・部分	陶器受付皿	8.6	1.6	-	灯明皿	18C前半
	184	188	876	3	東郎	S X313 3層	唐津窑船輪器	-	[8.5]	8.4		18C前半
185	187	874・875	3	東郎	S X313 1層・同2層 同3層・S X316切 合口・部分	丹波窯縫掛け流し鉢	15.1	10.9	12.5		18C	
186	189	875	3	東郎	S X313 2層	波佐見窑染付陶	9.9	5.2	3.5	梅花文、高台内輪	18C前半	
187	190	692・318*	3	東郎	精査口・S X313 1層	波佐見窑染付削利	2.0	14.9	(4.5)	繪唐草文	18C	
188	90	961	3	東郎	S X315	土師器皿 (灯明皿)	7.7	1.6	6.1			
189	91	976	3	東郎	S X315右端之内	土師器皿	8.3	1.9	6.85			
190	193	596・874*	3	東郎	S K24・S X313 1層・S X315	波佐見窑染付陶	9.6	7.0	4.2	よろけ彫文	1700年前後	
191	195	1066	3	東郎	S X315	波佐見窑染付陶	(11.7)	5.8	4.1	界線文	18C前半	
192	194	1065・1132	3	東郎	S X315・同 鈴形 急折腰青花瓶	(13.5)	2.6	(8.0)	花鳥文	16C後半		
193	192	963	3	東郎	S X315削掛出し 波佐見窑染付皿	(20.3)	4.1	(11.0)	家屋文、高台内輪	18C前半		
194	100	832	3	東郎	S X351	土師器皿	(7.4)	1.7	(6.0)	回転点切り		
195	101	1088	3	東郎	S X351下部	土師器皿	(7.6)	1.7	(6.2)	回転点切り		
		678・683*			S K351・S X351横 出中・模地層・S X 303・S X304・S K 305削削口・S X351	土師器皿	11.4	1.9	5.2	灯明皿、柿桶		
196	267	684・723*	3	東郎	S X351下部	-	[4.2]	-	最大径5.2cm			
197	269	1088	3	東郎	S X351下部	土鉢	-					
198	268	1088・1091・ 1094	3	東郎	S X351・同 下鉢 同 下位南半	土師器皿	(24.8)	7.7	-	難波D型		
199	81	742	3	東郎	S K301東半1層	土師器皿	6.15	1.55	4.95	回転点切り		
200	77	742	3	東郎	S K301東半1層	土師器皿	6.2	1.65	5.0	回転点切り		
201	76	742	3	東郎	S K301東半1層	土師器皿 (灯明皿)	6.3	1.5	4.6	点切り		
202	72	722	3	東郎	S K301	土師器皿 (灯明皿)	6.35	1.55	4.55	回転点切り		
203	75	742	3	東郎	S K301東半1層	土師器皿	6.35	1.6	4.6	回転点切り		
204	79	722	3	東郎	S K301	土師器皿 (灯明皿)	6.35	1.65	4.7	回転点切り		
205	67	722	3	東郎	S K301	土師器皿 (灯明皿)	6.4	1.5	4.5	回転点切り		
206	68	722	3	東郎	S K301	土師器皿	6.4	1.7	4.6	回転点切り		
207	66	722	3	東郎	S K301	土師器皿 (灯明皿)	6.4	1.5	4.7	回転点切り (不鮮明)		
208	80	777	3	東郎	S K301西半	土師器皿 (灯明皿)	6.45	1.6	4.55	回転点切り (不鮮明)		
209	62	621	3	東郎	S K301	土師器皿 (灯明皿)	6.45	1.6	4.6	回転点切り		
210	63	621	3	東郎	S K301	土師器皿	6.45	1.45	5.15	回転点切り		
211	82	742	3	東郎	S K301東半1層	土師器皿	6.5	1.45	5.0	回転点切り		
212	79	777	3	東郎	S K301西半	土師器皿 (灯明皿)	6.55	1.7	4.9	点切り?		
213	69	722	3	東郎	S K301	土師器皿	6.6	1.7	4.5	回転点切り (不鮮明)		
214	71	722	3	東郎	S K301	土師器皿 (灯明皿?)	6.6	1.5	4.7	回転点切り (不鮮明)		
215	64	621	3	東郎	S K301	土師器皿 (灯明皿)	6.8	1.45	4.3			
216	73	722	3	東郎	S K301	土師器皿 (灯明皿)	6.85	1.5	4.45	回転点切り		
217	65	621	3	東郎	S K301	土師器皿 (灯明皿)	6.9	1.5	4.8	点切り? (摩耗)		
218	74	621・722	3	東郎	S K301	土師器皿	8.5	2.0	6.5	回転点切り (不鮮明)		
219	83	742・748	3	東郎	S K301東半1層	土師器皿	(10.8)	1.7	(5.95)	回転点切り		
220	146	722	3	東郎	S K301	土師器皿	(9.4)	1.5	(6.8)	墨波D型・回転点切り	18C前半	
	147	621・722*	3	東郎	S K301・同 東半1層	土師器皿受付皿	(11.6)	1.9	-	灯明皿、柿桶、 回転点ケズリ	18C前半	
222	99	681	3	東郎	S K301	備前窯系枕楕陶	11.0	2.0	4.8	回転点ケズリ	18C前半	
223	148	776	3	東郎	S K301・同 東半2 ~3層	土師器皿	26.0	(6.8)	-	難波D型		
224	149	742・748*	3	東郎	S K301・同 東半1 層・同 東半2~3層 (716・716)	土師器皿	28.0	6.7	-	難波E型		
225	143	621・722	3	東郎	S K301	肥前窯系枕楕陶	12.8	5.3	4.6	櫻蘭山文木、高台内輪	18C初	
226	144	722	3	東郎	S K301	唐津窑	-	(6.2)	6.0	桐毛目文	18C前半	
227	145	681	3	東郎	S K301	波佐見窑	(9.4)	5.9	4.6		18C前半	
69	228	133	681・772	3	東郎	S K301・同 東半2 ~3層	波佐見白磁碗	(11.5)	6.3	(5.0)	藤文・關則	18C前半
	229	134	681	3	東郎	S K301	波佐見窑染付陶	9.4	5.2	3.6	竹文、高台内輪	18C前半
230	139	620・742	3	東郎	S K301	波佐見窑染付陶	9.6	5.5	4.0	篠文、高台内輪	18C前半	
231	135	621	3	東郎	S K301	波佐見窑染付陶	(10.0)	5.5	3.9	駒文	18C前半	
232	137	748	3	東郎	S K301東半1層	波佐見白磁小碗	(8.0)	4.9	3.2		18C前半	
233	136	621・722	3	東郎	S K301	波佐見窑染付小碗	8.1	4.5	3.5	桐文	18C前半	
	234	138	620・621・ 742	3	東郎	S K301	波佐見窑染付陶	12.5	3.5	7.0	五弁茫茫	18C前半

高麗 朝鮮 年号	物語 番号	実物 番号	銘番号	横出 面	区名	出土遺物名	器種等	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考	時期
69	235	142 681	3	東部	S K301	波佐見窯染付鉢皿	3.7 (5.2)	-	-	-	18C前半	
236	140 612 + 681	3	東部	S K301	波佐見窯染付小杯	6.5 (3.9)	4.9	-	-	18C前半		
237	141 681 + 122 331 + 359 + 691	3	東部	S K301	波佐見窯染付桃紋鉢	(20.2)	7.5 (10.6)	-	牡丹唐草文	18C前半		
238	84 625	3	東部	S K302	土師器皿	(7.0)	1.45 -	6.15	回転糸切り	-		
239	150 836 + 884	3	東部	S K302南部	土師器泡湯	25.0 (13.0)	7.0 3.0	-	難波C型?	-		
240	151 657	3	東部	S K302	唐津窯銅緑釉皿	-	-	4.6	-	18C前半?		
241	159 815	3	東部	S K303	肥前系陶器掛分け17碗	(15.2) (15.2)	8.6 8.6	(6.0)	-	18C前半		
242	156 815	3	東部	S K303	唐津窯銅緑釉皿	-	11.4 (10.6)	3.5 3.5	-	18C前半		
243	161 1012 + 1046 1056 + 1204 + 1235	3	東部	S K302・S K303・ S X324 S X-404検出中	唐津窯大鉢	(38.4)	9.8 (13.5)	-	刷毛目文	18C前半		
244	152 1041	3	東部	S K303	波佐見窯染付碗	(10.6)	5.7 -	4.1	-	18C前半		
245	153 1041 + 1085 - 1172	3	東部	S K303・S X303 S K403	波佐見窯白磁輪花瓶	(10.3)	7.0 - (10.6)	4.6	-	18C前半		
246	160 969 + 815 + 1328	3	東部	S K303 + S K303 S X129 + 壁面削	波佐見窯染付香炉	(10.9)	7.3 - (10.6)	5.8	-	18C前半		
247	154 1041	3	東部	S K303	波佐見窯白磁瓶	(7.2)	3.1 - (6.4)	3.4	-	18C前半		
248	155 1041 + 1134	3	東部	S K303・S X324	波佐見窯白磁瓶	(6.4)	2.0 - (6.4)	3.0	-	18C前半		
249	158 815 + 3041	3	東部	S K303	波佐見窯白磁碗底	(11.8)	2.5 - (11.8)	5.9	-	18C前半		
250	157 815	3	東部	S K303	唐津窯染付仏瓶具	(7.6)	6.1 - (7.6)	4.0	-	18C前半		
251	162 815 + 1088	3	東部	S K303・S X351下部	唐津窯不明 研磨水漬	長5.3 - (5.3)	2.6 - (2.6)	4.3	口徑0.8	-		
70	252	163 735 + 743	3	東部	S K303・S K307の赤鉄 瓦器土器羽釜(事故品)	-	(4.2)	-	-	-	-	
253	85 745	3	東部	S K308	土師器皿	7.8 - (7.8)	1.6	6.3	回転糸切り	-		
254	212 746	3	東部	S K308断面中 (下層) S K308上層 (上面上)	土師器皿	7.0 - (7.0)	1.2	6.6	底部外側:墨書き (西経不能)	18C前半		
255	88 1296	3	東部	S X301下層	土師器皿	(4.8)	2.0 - (4.8)	6.6	回転糸切り	-		
256	86 823	3	東部	S X301	土師器皿	(10.5)	1.9 - (10.5)	5.0	回転糸切り	-		
257	87 662 + 759	3	東部	S X301・聖地層	土師器皿	10.5 - (10.5)	1.75	5.4	回転糸切り	-		
258	172 658 + 814	3	東部	S X301	唐津窯茶碗	(10.9)	6.4 - (10.9)	4.0	刷毛目文	18C前半		
259	176 1296	3	東部	S X301下層	唐津窯銅緑釉皿	11.7 - (11.7)	3.6 - (3.6)	4.5	-	18C前半		
260	167 682	3	東部	S X301	波佐見窯染付碗	(9.8)	5.7 - (9.8)	3.9	草花文、高台内蔵	18C前半		
261	169 682	3	東部	S X301	波佐見窯染付碗	9.1 - (9.1)	5.4 - (5.4)	3.9	松文、高台内蔵	18C前半		
262	168 715	3	東部	S X301	波佐見窯染付碗	(9.5)	5.2 - (9.5)	3.5	松竹文	18C前半		
263	171 626 + 1296	3	東部	S X303・S X303下層	波佐見窯染付碗	(10.4)	6.0 - (10.4)	3.9	鳥文	18C前半		
264	175 747	3	東部	S X301下層	波佐見窯染付皿	(13.7)	3.1 - (13.7)	7.8	波文、墨書き。口紅 高台内蔵	17C後半		
265	170 658	3	東部	S X301	波佐見窯染付灰具	(8.4)	6.0 - (8.4)	4.1	-	18C前半		
266	177 632 + 658 + 681 + 682 + 745	3	東部	S X301・S X207 S K301東山1層	聖地層・聖地層 (下層)・S K301	波佐見窯染付皿	18.2 - (18.2)	3.2 - (3.2)	11.3	島文、墨書き。口紅 高台内蔵	17C後半	
267	174 288 + 550 + 1153	3	東部	S X301北上・聖地層 (下層)・S K354	波佐見窯染付茶器手盤	(21.1)	3.6 - (21.1)	(11.6)	ハリ支え	17C後半		
268	173 247 + 626 + 715 + 1296	3	東部	S X301 (主に下層)	波佐見窯染付鉢利 同 下層	-	[9.6]	7.0 - (9.6)	草花文	18C前半		
71	269	89 679	3	東部	S X302	土師器皿	6.8 - (6.8)	1.45 - (1.45)	4.85	回転糸切り	-	
270	181 624	3	東部	S X302	瓶戸・美濃窯折縫罐	(13.0)	2.4 - (2.4)	7.1	-	18C前半		
271	178 720	3	東部	S X302・S X303 S X302・聖地層・S K122	唐津窯三島手大鉢 土壁器別	(34.8)	11.4 - (11.4)	13.0	砂目	17C後半		
272	183 620 + 624 * 720 + 721	3	東部	S X302	聖地層・S X302・同 上層・同 下層	波佐見窯染付鉢	(36.6)	13.5 - (13.5)	12.0	横目15本	-	
273	180 626 + 721	3	東部	S X302・下層・S X303	波佐見窯染付碗	(10.7)	6.3 - (10.7)	4.2	草花文、高台内蔵	18C前半		
274	182 624	3	東部	S X302	波佐見窯染付小碗	(8.4)	5.0 - (8.4)	3.1	鳥文	18C前半		
275	179 620 + 656 + 794	3	東部	S X302・S X302・ S X303南端	聖地層・S X302・ 津州窯青花盤	(25.4)	(5.0)	13.0 - (5.0)	不死鳥文	16C末~ 17C初		
72	276	184 974 + 1062 + 1065 + 1012 + 1030	3	東部	精查中・聖地層 (下) S X318・S X306	波佐見窯染付皿	20.8 - (20.8)	2.7 - (2.7)	10.1	岩島文	17C後半	
277	185 949	3	東部	S X308	波佐見窯染付皿	(13.0)	3.2 - (3.2)	(8.1)	-	18C前半		
278	186 949	3	東部	S X308	波佐見窯染付鉢	-	[3.0]	3.7	-	18C前半		
279	94 1090	3	東部	S X316東端	土師器皿	7.25 - (7.25)	1.3 - (1.3)	-	-	-		
280	92 1089 + 1090	3	東部	S X316東端	土師器皿	6.75 - (6.75)	1.45 - (1.45)	5.0	回転糸切り	-		
281	93 1082	3	東部	S X316東平	土師器皿	6.95 - (6.95)	1.8 - (1.8)	4.25	回転糸切り	-		
282	96 1080	3	東部	S X316西平	土師器皿	(7.4)	1.1 - (1.1)	(6.9)	回転糸切り	-		
283	97 1056	3	東部	S X316西平	土師器皿 (灯明皿)	8.0 - (8.0)	1.9 - (1.9)	6.4	回転糸切り	-		
284	95 1047	3	東部	S X316東平	土師器皿 (灯明皿)	8.4 - (8.4)	1.95 - (1.95)	6.45	回転糸切り	-		
285	98 1089	3	東部	S X316東端	備野家宗 (灯明皿)	(8.4)	1.3 - (1.3)	4.2	回転ヘラケズリ	18C前半		
286	211 1089 + 1090	3	東部	S X316東端	備野家宗 (分切端)	11.2 - (11.2)	4.3 - (4.3)	4.9	-	18C前半		

通巻 番号	出物 番号	銘番号	検出 面	区名	出土遺構名	器種等	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考	時期	
72	287	241	677・907・ 1056・1100	3 東部	整地層・S X316西半・同 石塁中部	唐津窯碗	[10.7]	6.9	[4.8]	網毛口文	18C前半	
	288	210	1099	3 東部	S X316東端	肥前系施釉陶器碗	[8.9]	6.9	[4.5]		18C前半	
	289	222	1082・ 1089・1090	3 東部	S X316東半・同東端	京焼風瓶	9.0	5.4	4.8	山水文、高台内蔵	18C前半	
	290	242	615・1056	3 東部	整地層・S X316西半	京焼風瓶	[8.8]	5.5	5.0	山水文、高台内蔵	18C前半	
	291	234	1110	3 東部	S X316石塁中部	道野窯青磁袖直瓶	11.8	3.5	4.5		18C前半	
	292	232	1089・1110	3 東部	石塁中部	道野窯青白釉直瓶	12.1	4.3	4.5		18C前半	
	293	202	977	3 東部	S X316	丹波窯火入れ	[11.8]	6.8	[8.4]			
	294	244	806・927・ 1056	3 東部	石列層・焼香舎中・S X316・同 西半	京焼系香炉	[12.2]	7.5	[7.0]	山水文	18C前半	
	295	243	1056・1080	3 東部	S X316西半	京焼系香炉	7.3	[6.6]	7.3		18C前半	
	296	245	1047・1080	3 東部	S X316東半・同	丹波窯淡釉片口壺	6.4	9.4	7.0		18C前半	
	297	246	1056	3 東部	S X316西半	清瀬窯淡釉直瓶	7.8	13.1	5.4		18C前半	
	298	200	613	3 東部	整地層	肥前(唐津?)窯直瓶	[21.0]	[7.1]	-	網毛口文	17C後半	
	299	214	374・907	3 東部	S X107・S X316	肥前(唐津?)窯直瓶	-	[12.4]	10.5	網毛口文	17C後半	
	300	213	1085	3 東部	S X353	唐津窯直瓶	[19.0]	[7.7]	-	網毛口文	17C後半	
	300	214	1089	3 東部	S X316東端	唐津窯直瓶	-	[5.6]	[9.1]	網毛口文	17C後半	
	301	208	1090・1111	3 東部	S X316東端	土器器在地系灯火具(五灯状)	-	13.5	-		18C	
	302	209	1090	3 東部	S X316東端	土器器在地系灯火具(五灯状)	-	7.4				
	302	236	1100	3 東部	S X316石塁中部	唐津窯直瓶	[21.7]	8.3	[9.0]		18C前半	
73	303	235	1100・1228	3 東部	S X316石塁中部・同 石塁下層	唐津窯片口鉢	20.3	11.0	8.7	網毛口文	17C後半	
	304	247	1056・ 1080・1084	3 東部	S X316西半	唐津窯二彩手鉢	-	[9.9]	[13.0]		18C前半	
	305	256	1060	3 東部	S X316西半	丹波窯深甌	18.0	[11.9]	-		18C	
	306	237	1100	3 東部	S X316石塁中部	唐津窯捲鉢	[37.0]	[7.5]	-	縦目11本	18C前半	
	307	248	1056・1084	3 東部	S X316西半・同 西側断面	唐津窯捲鉢	[35.8]	[7.9]	-	縦目11本	18C前半	
	308	215	1089	3 東部	S X316東端	備前窯捲鉢	[31.8]	14.2	[18.0]	縦目10本	18C前半	
	309	196	613・715・ 905・947・ 1034・1047	3 東部	整地層・S K123腰形 内精中・S X316移出中・同 西半・同 東半	唐津窯片口鉢	[32.8]	13.8	[14.0]	縦目15本		
	310	249	1014・1080	3 東部	整地層(下)・S X316西半	丹波窯深甌	[42.8]	[16.0]	-	長谷川IV22a型、 不透水	18C	
74	311	225	1082・1090	3 東部	S X316東半・同東端	波佐見白磁碗	9.6	5.5	4.0	口紅	18C前半	
	312	252	1056	3 東部	S X316西半	波佐見白磁碗	[10.1]	5.8	[4.4]		18C前半	
	313	216	968・1089	3 東部	S X315腰形・S X 316東端	波佐見白磁碗	9.0	5.5	3.6	口紅	18C前半	
	314	229	1110・1125	3 東部	S X316石塁中部・同 東端	波佐見白磁染付鉢	9.3	5.0	3.8	草花文、高台内蔵	18C前半	
	315	227	1082・1089	3 東部	S X316東半・同東端	波佐見白磁染付鉢	9.8	5.6	3.8		18C前半	
	316	226	1082・1089	3 東部	S X316東半・同東端	波佐見白磁染付鉢	[10.3]	5.5	4.1	楓文	18C前半	
	317	224	1082・1089	3 東部	S X316東半・同東端	波佐見白磁染付鉢	[9.8]	5.5	[4.7]	七宝文	18C前半	
	318	251	1056	3 東部	S X316西半	波佐見白磁染付鉢	[9.2]	6.6	5.5	八ツ櫛草花文	18C前半	
	319	259	1056	3 東部	S X316西半	津浦窯青花碗	[11.0]	5.1	[4.6]	竈子文	16C末～ 17C初	
	320	203	977・1041	3 東部	S X316・S K303	波佐見白磁染付鉢	[11.6]	5.2	4.2	菊文	18C前半	
	321	249	1210	3 東部	S X316石塁中部下層	波佐見白磁染付鉢	[12.2]	5.0	4.6	界隈文	18C前半	
	322	223	1082・1089	3 東部	S X316東半・同東端	波佐見白磁染付鉢	8.5	4.6	3.4	楓文	18C前半	
	323	204	907	3 東部	S X316	波佐見白磁染付鉢	[8.0]	4.3	3.0	雨降り文	17C後半	
	324	217	1125	3 東部	S X316東端	波佐見白磁染付鉢	[7.2]	4.2	[3.8]	桐文	18C半ば	
	325	238	1110	3 東部	S X316石塁中部	波佐見白磁染付鉢	6.3	2.8	2.9	雨降り文	18C前半	
	326	221	1089	3 東部	S X316東端	波佐見白磁染付飯盒	7.4	5.1	3.8	雨降り文	18C前半	
	327	220	1089・ 1090・1094	3 東部	S X316東半・S X 316石塁中部	波佐見白磁染付口盃	7.7	5.3	4.2	草花文、高台内蔵	18C前半	
	328	231	1110・1125	3 東部	同 石塁	波佐見白磁染付口盃	6.9	5.5	4.3	梅花文、高台内蔵	18C前半	
	329	205	977・1041	3 東部	S X316・S K303	波佐見白磁染付口盃	7.4	5.4	3.7	八ツ櫛文	18C前半	
	330	253	1082	3 東部	S X316西半	波佐見白磁小杯	[5.8]	4.1	3.9		18C前半	
	331	228	1082・1089	3 東部	S X316東半・同東端	波佐見白磁染付口盃	12.0	8.7	7.3	唐草文	18C前半	
	332	197	947・977	3 東部	S X316腰形出中・S X316	波佐見白磁染付皿	[12.4]	3.9	4.0	二重斜格子文	18C前半	
	333	219	1089	3 東部	S X316東端	波佐見白磁染付皿	[12.4]	3.7	[6.8]	草花文	18C前半	
	334	218	1125	3 東部	S X316東端	波佐見白磁染付皿	14.4	3.6	7.5	唐草文	18C前半	
	335	198	947	3 東部	S X316東端	波佐見白磁染付皿	[13.0]	2.7	[7.6]	五瓣花文	18C前半	
	336	199	334・ 947	3 東部	S X316東端	精蓋口・整地層・ S X316腰形出中	波佐見白磁染付皿	12.3	3.6	4.2	折れ松文	18C前半
	337	230	1090・1110	3 東部	S X316東端	波佐見白磁染付皿	9.1	2.6	4.0		18C前半	
	338	254	662・677・ 1056・1080	3 東部	S X316・整地層(下)	波佐見白磁染付皿	-	[2.3]	12.1	牡丹唐草文	18C前半	
	339	255	1056・1080	3 東部	S X316西半	整地層・第4造構造(一 層)・S X303・S X 316東半・同 石塁中部	波佐見白磁染付皿	12.8	2.8	7.7	柳文	18C後半
	340	233	1082・ 1110・ +626・ 1082	3 東部	S X316西半	波佐見白磁染付手鉢	[19.6]	[4.3]	-		18C前半	
	341	207	1110	3 東部	S X316	波佐見白磁鉢	[21.2]	6.2	[6.4)		18C前半	
	342	239	1110	3 東部	S X316石塁中部	波佐見白磁染付鉢	3.8	[7.8]	-		18C前半	
	343	206	374・ +607	3 東部	S K123・S K310・ S X316	波佐見白磁染付鉢	-	[11.0]	6.4	草花文	18C前半	

器種 番号	遺物 番号	房番号	検出 面	区名	出土遺物名	器種等	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考	時期
75	344 257 1002 + 1005	3 東部	S X318	土師器泡塔	25.5	7.4	-	-	-	難波D瓶、口縁2孔残存	
	345 258 1066	3 東部	S X320	土師器泡塔	26.0	8.0	-	-	-	難波D瓶、口縁2孔1対	
	346 260 1117	3 東部	S X323	波佐見窯染付瓶	12.8	3.9	4.0	-	-	松葉文?	18C前半
	347 261 1117	3 東部	S X323	初期伊万里窑付皿	(9.4)	2.8	3.1	-	-	-	17C2/4
	348 259 1117	3 東部	S X323	繩引美濃窯白釉片口鉢	15.4	11.1	7.7	-	-	-	18C前半
	349 265 1058 + 1085+ 1124	3 東部	S X303 + S X353	肥前系京焼風陶器皿	12.7	4.5	4.7	-	-	高台内鉢	18C前半
	350 263 1124	3 東部	S X324	唐津窑洗綠色釉皿	(12.2)	3.4	(4.0)	砂目	-	-	17C2/4
	351 266 1658 + 1666 + 1135	3 東部	S K303 + S X316 S X324 + S X353	波佐見窯染付碗 波佐見窯染付瓶	9.8	5.3	4.0	草花文	-	-	18C前半
	352 264 1124	3 東部	S X324	波佐見窯白磁小碗	(9.4)	4.9	(3.4)	口紅	-	-	18C前半
	353 262 1114 + 1172	3 東部	S X324 + S K403	波佐見窯染付瓶	12.85	3.4	7.4	桐葉文?	-	-	18C前半
	354 270 1077	3 東部	S X352	肥前窯仏瓶具	(8.4)	6.5	4.6	墨面? 楠書「大佛」 丸文	-	-	
	355 46 691	3 西部	S B305上開内貝層	土師器皿 (灯明皿)	7.6	1.8	6.7	-	-	回転舟切り	
	356 47 691	3 西部	S B305上開内貝層	土師器皿 (灯明皿)	8.05	1.6	7.35	回転舟切り	-	-	
	357 82 691	3 西部	S B305上開内貝層	土師器皿 (灯明?) 器 種不明	-	[14.3]	-	-	-	体部内面: 楠子タタキ	
	358 83 643	2 西部	S B205上面	波佐見窯 (陶器) ? 器 種不明	-	[6.5]	(18.0)	-	-	体部内面: 楠子タタキ	
	359 164 842	3 西部	S K313崩形	繩引美濃窯灰釉輪	(25.3)	5.7	(14.6)	-	-	-	18C前半
	360 165 805	3 西部	S K313埋土	波佐見窯白磁菊瓶	(12.8)	[3.5]	-	-	-	-	18C前半
	361 166 744	3 西部	S P301	土師器壺蓋	-	[18.1]	11.5	陶衣表	-	-	
76	362 278 890	3 中央部	第3構造面 (S B202 カマド西平滑面)	丹波窯縫跡	(20.4)	9.8	(11.0)	縫目 7本	-	-	17C1/4
	363 104 1176	東部	第3構造面ベース層	土師器燒底蓋	(6.8)	1.25	4.9	小川A類 1	-	-	17C1/4 or 2/4
	364 273 941 + 1166	東部	第3構造面二ース層	繩引伊万里? 焼付碗	10.6	7.7	(5.6)	福字文	-	-	
	365 276 1141 + 1152	東部	第3構造面ベース層	丹波窯窓	(30.8)	[28.3]	(16.0)	長谷川III類?	-	-	
	366 271 1136 + 1215	中央部	第3構造面ベース層・ 第3構造面二ース層	土師器三足付皿	(25.0)	8.6	-	-	-	-	
	367 272 1108	中央部	第3構造面ベース層	土師器三足付足	(24.4)	8.1	-	-	-	底部舟切り痕	
	368 275 1108	中央部	第3構造面ベース層	唐津窯碗?	-	[3.0]	4.7	-	-	-	17C1/4
	369 277 1108	中央部	第3構造面ベース層	窓地不明窯器水滴	高さ3.6	5.9	厚さ [1.5]	-	-	-	
	370 274 1136	中央部	第3構造面ベース層	窓地不明 瓷胎瓶	-	[18.1]	-	-	-	-	
	371 103 1175	4 東部	S X403	土師器皿	7.45	1.45	6.5	回転舟切り (摩利)	-	-	
	372 279 1187	4 中央部	S B403	唐津窯灰釉輪	(11.9)	3.2	4.4	-	-	-	17C1/4
	373 280 1189	4 中央部	S B403	唐津窯灰黄色釉輪	(21.4)	(4.9)	-	-	-	-	17C2/4
	374 281 1222	中央部	S B401ベース層	唐津窯灰褐色釉	(9.8)	5.9	4.3	-	-	-	17C1/4
	375 102 1193	中央部	S B402ベース層	土師器蓋	8.35	2.1	3.9	-	-	-	
	376 282 1271	中央部	S B402ロリベース層	唐津窯灰釉千瓣皿	(11.8)	3.6	(4.2)	-	-	-	17C1/4
	377 283 1222	中央部	S B402ベース層	唐津窯白釉千瓣皿	(14.4)	4.3	5.3	-	-	-	17C2/4
77	378 284 1262	東部	第4構造面ベース層	津屋窯白磁盤	(12.4)	3.4	(6.4)	-	-	-	
	379 287 1269	中央部	第4構造面ベース層	唐津窯蓋	(11.0)	2.9	4.5	駄目土。口紅	-	-	
	380 286 1269	中央部	第4構造面ベース層	津屋窯染付皿? 小天目碗	5.8	3.2	2.8	-	-	-	
	381 288 1269	中央部	第4構造面ベース層	駄目青瓷瓶	(12.2)	5.1	5.7	砂目	-	-	15C後半
	382 285 1215	中央部	第4構造面ベース層	土師器泡塔	23.7	(7.5)	-	難波A類	-	-	
	383 289 1215	中央部	第4構造面造成層	唐津窯蓋	(10.8)	3.2	4.2	砂目	-	-	
	384 290 1215	中央部	第4構造面造成層	備前窯花生	-	(6.5)	3.6	-	-	-	
	385 291 1215	中央部	第4構造面造成層	中国 白磁瓶	(11.0)	2.7	6.2	-	-	-	
	386 295 1251	西部	第4構造面造成層	肥前窯? 腹	10.9	7.1	4.3	-	-	-	
	387 296 1251	西部	第4構造面造成層	肥前窯蓋	(13.3)	3.2	6.4	口紅	-	-	
	388 292 1251	西部	第4構造面造成層	丹波窯灰火入れ	(12.8)	7.0	(10.2)	-	-	-	
	389 293 1251	西部	第4構造面造成層	丹波窯裂片口鉢	(22.6)	9.9	(12.2)	-	-	-	
	390 294 1251	西部	第4構造面造成層	丹波窯體	(32.3)	16.1	(13.6)	縫目5本。 長谷川II類 (クシ) 類	-	-	
	391 297 1262 + 1279	5 東部	S D501・第4構造面 ベース層	津屋窯白磁烟反瓶	(12.4)	3.3	(6.3)	-	-	16C末~ 17C初	
	392 298 1266	5 東部	S D501	昭和王朝陶瓶と銘利	-	-	-	-	-	16C末~ 17C初	
	393 299 1270	5 中央部	S K502	波佐見窯白磁瓶	-	(6.7)	5.1	朝鮮標記	-	-	17C後半
	394 300 1224	5 中央部	落ち込み	津屋窯青花碗	-	[1.3]	(4.6)	-	-	武面? 楠書「八」	
	395 301 331	東部	精査中	土師器蓋	6.5	1.5	4.8	武面? 楠書「八」	見込み: 楠書 「天面」(天面) [一]	-	
	396 302 846	西部	複数内	土師器蓋	(5.5)	0.7	-	-	-	-	
52	438 66 705	2 中央部	S B201燒土面上面	土	長さ14.4	幅5.8	高さ1.2	145.5g	-	-	
	439 74 690	2 中央部	S B201裏焼土面上直上	土	長さ (7.5)	幅5.3	高さ1.4	81.5g	-	-	
	440 303 035	西部	掘立柱	土	15.7	幅6.1	高さ2.1	299.0g	-	-	
	441 36 415	1 中央部	S X131	瓦石	(11.0)	幅3.9	厚さ3.3	196.5g	-	-	
	442 73 527	2 中央部	S B201裏焼土面上直上	瓦石	長さ [8.0]	幅4.1	厚さ (0.9)	48.5g	-	-	

表7 出土瓦観察表

※時期は世紀を略してCと表記し、時期の明確なものについては1世紀内を4分割して表示している（例：17C2/4=17世紀第2四半期）。

施設区分 番号	遺物 番号	実測 番号	R番号	検出 面	区名	出土遺物名	器種等	（ ）内の数値は推定値、〔 〕内の数値は残存値を示す。						
								瓦当幅・ 径（cm）	瓦当高 (cm)	全長 (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	時期
78	397	334	719	3	東部	S X 303・S X 304・S K 305 断削中	軒丸瓦	(16.0)	-	[14.7]	-	-	-	
	398	332	973	3	東部	整地層（下）	軒丸瓦	(12.6)	-	[3.6]	-	-	-	
	399	319	351	2	中央部	S B 202 上面焼土	軒丸瓦	(14.0)	-	[8.3]	-	-	-	
	400	316	671	1	東部	S X 129 錐形	軒丸瓦	[4.2]	-	[1.6]	-	-	-	
	401	308	227・314	1	西部	S K 112	軒丸瓦	(13.6)	-	[9.5]	-	-	-	
	402	315	139	1	中央部	S X 113	軒丸瓦	(13.2)	-	[2.5]	-	-	-	
	403	309	227・314	1	西部	S K 112	軒丸瓦	(13.8)	-	[4.2]	-	-	-	
	404	321	385	2	中央部	精査中（S B 202 内？・S X 124 内遺物含む？）	軒丸瓦	(13.8)	-	[5.4]	-	-	-	
	405	328	571	3	西部	S B 205～ス層	軒丸瓦	(14.0)	-	[1.5]	-	-	-	
	406	341	752	4	西部	S B 305～ス層	軒丸瓦	(13.7)	-	[3.2]	-	-	-	
	407	335	626	3	東部	S X 303	軒丸瓦	(14.0)	-	[11.8]	-	-	-	
	408	306	669	1	東部	S K 104 石組み	軒丸瓦	(16.0)	-	[1.9]	-	-	-	
79	409	314	545	1	東部	S X 101（大半錐形内）	軒丸瓦	(14.0)	-	[2.6]	-	-	-	
	410	333	979	3	東部	S X 305・S X 129 切り合い部	軒丸瓦	(14.0)	-	[4.9]	-	-	-	
	411	324	375	2	東部	S B 208 上面焼土	軒丸瓦	(13.0)	-	[2.4]	-	-	-	
	412	343	1215	5	中央部	第4造構面成層	軒平瓦	21.4	4.5	[12.3]	-	-	-	南北朝～室町前期
	413	342	845	4	中央部	第3造構面～ス層	軒平瓦	[7.6]	[4.7]	[8.5]	-	-	-	
	414	336	798	3	東部	S X 309	軒平瓦	[9.0]	3.2	[5.2]	-	-	-	
	415	331	908	3	東部	整地層	軒平瓦	[8.9]	3.3	[5.1]	-	-	-	
	416	313	332	1	東部	S K 121	軒平瓦	[9.8]	4.0	[5.5]	-	-	-	
	417	325	356	2	東部	S B 208 上面焼土	軒平瓦	[9.6]	3.6	[4.8]	-	-	-	
	418	326	1356	2	東部	S B 208 上面焼土・土壤遷別	軒平瓦	[7.0]	3.6	[6.2]	-	-	-	
	419	337	833	3	東部	S X 312	軒平瓦	[10.5]	[3.7]	[4.3]	-	-	-	
	420	340	1094	3	東部	S X 351 下位南半	軒平瓦	[11.6]	3.5	[7.2]	-	-	-	
	421	322	385	2	中央部	精査中（S B 202 内？・S X 124 内遺物含む？）	軒平瓦	[7.0]	3.9	[4.8]	-	-	-	
	422	338	977	3	東部	S X 316	軒平瓦	[14.0]	3.8	[5.3]	-	-	-	
80	423	317	485・700	2	中央部	S X 127 下層	軒平瓦	27.6	4.2	29.9	-	-	1.7	
	424	329	575	3	西部	S B 205～ス層	軒平瓦	(17.9)	4.5	[7.7]	-	-	-	
	425	330	575	3	西部	S B 205～ス層	軒平瓦	(14.0)	4.6	[8.9]	-	-	-	
	426	327	632	2	中央部	S X 207	軒平瓦	(13.4)	3.8	[6.7]	-	-	-	
	427	304	238	1	中央部	搅乱（近代井戸）	軒平瓦	(21.0)	4.0	[16.3]	-	-	-	
	428	305	238	1	中央部	搅乱（近代井戸）	軒平瓦	(7.7)	[3.6]	[7.8]	-	-	-	
	429	312	292・332	1	東部	S K 121	軒丸瓦	(21.6)	4.0	25.2	24.5	-	1.4	
	430	307	319・358	1	東部	S K 104	軒丸瓦	(19.5)	[1.5]	34.6	-	-	1.7	
	431	311	210	1	中央部	S K 113 焼土	小菊丸瓦	(8.0)	-	[6.0]	-	-	-	
	432	318	216	2	中央部	S B 201 上面整地層	小菊丸瓦	8.0	-	[2.0]	-	-	-	
	433	310	227	1	西部	S K 112	丸瓦	-	-	24.0	12.5	5.2	1.6	
	434	323	983	2	中央部	S B 204 カマド断削口	丸瓦	-	-	23.3	12.4	6.2	1.6	
	435	320	341	2	中央部	S B 202 上面焼土	解瓦	-	-	[8.3]	[23.8]	-	-	
	436	339	1106	3	東部	S X 321	引抜け (軒平)瓦	-	-	[13.4]	[11.3]	-	1.9	
	437	344	1281	5	東部	第5造構面上面	解瓦	-	-	[10.9]	[14.3]	[6.7]	2.1	